

◆ パネリスト

クオルス株式会社代表取締役

たかなみ としゆき
高波 利幸氏



1968年上越市安塚区生まれ。服部栄養専門学校調理師本科卒。都内イタリア料理店にて7年間修業後、帰省し1993年に市内にイタリア料理店を開業。新潟市への開業後、“新潟発イタリア食堂の挑戦”として、都内南青山、銀座、川崎に店舗を展開。

2012年には日本人初、イタリア・ローマにも開業、2013年にはイタリア政府認定レストランに選出される。同年、書籍『有言絶対実行！描いたビジョンの実現力』を発売。2016年には、市内に“イタリアの広場”を再現する地域とのコミュニケーションを創出する建物を新築開業予定。

地産地消をテーマに上越の生産者と協力し、野菜・果実やお米、魚介や食肉に至るまで地元食材を全店舗にて使用している。

NPO法人マミーズ・ネット 理事長

なかじょう みなこ
中條 美奈子氏



上越市生まれ。東京で高校教員をしていたが夫の転勤のため退職。1991年に仙台市で育児サークルを主宰し、「仙台子育てベイビーバイブル」の出版に係わって以来、子育て中の人たちの社会参画支援や、居場所づくり、子育て情報発信に取り組む。

1996年に上越市で育児サークルの連絡会マミーズ・ネットの設立から参加。2004年法人化とともに理事長就任。子育て当事者にむけた講座や、家庭教育・子育て支援をテーマとして学校、公民館等で行うワークショップなどの企画を行い講師を務める。また、地元企業と連携し、企業で行う父親講座やワークショップを実施するほか、男女ともに子育てしやすい環境づくりに向けた活動を行うなど、男女共同参画の推進、ワーク・ライフ・バランスの実現に関する啓発活動等も行っている。

主な役職に、NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事、新潟県社会教育委員、上越市子ども・子育て会議委員などがある。

NPO法人かみえちご山里 ファン倶楽部 専務理事

せきはら つよし
関原 剛氏



1961年糸魚川市生まれ。1981年に商業施設デザイン業務を経て、1995年に上越市へ1ターン。1997年から(協)ウッドワーク事務局長（現在は顧問）を務める。地域杉材による高付加価値家具開発及び森林NPO（木と遊ぶ研究所）による産地証明を開発。この取組は1999年農林水産大臣賞受賞。

2001年NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部を設立（専務理事）。2011年オーライ日本大賞フレンドシップ大賞、2013年総務大臣表彰、2014年共同通信社地域再生大賞特別賞など受賞。

主な役職に、農林水産省地域産業マネージャー、(財)都市農山漁村交流活性化機構 農村資源活用検討委員会委員、公益財団法人鼓童文化財団評議員、NPO法人日本エコツーリズムセンター世話人、NPO法人東京生活デザインミュージアム理事、LEAF 森林環境教育プログラム日本支部評議委員、総務省地域力創造アドバイザーなどがある。

◆ コメンテーター

内閣官房まち・ひと・しごと 創生本部 事務局次長

すえむね てつろう
末宗 徹郎氏

(基調講演講師)

◆ コーディネーター

上越市創造行政研究所長 ・高崎経済大学名誉教授

とどころ たかし
戸所 隆



1948年群馬県前橋市生まれ。立命館大学文学部教授、高崎経済大学地域政策学部教授を経て2014年から高崎経済大学名誉教授。専門は都市地理学・都市政策学・国土構造論。専門地域調査士。文学博士。

国の国会等移転審議会・経済審議会・学術審議会専門委員、日本都市学会会長、日本地理学会理事などを歴任し、現在、日本学術会議連携会員、上越市創造行政研究所長、草津市相談役、群馬県文化財保護審議会副会長などを務める。

著書に『地域政策学入門』『日常空間を活かした観光まちづくり』『地域主権への市町村合併』（古今書院）などがある。

◆事例報告・意見交換

パネリスト

- クオルス株式会社 代表取締役
高波 利幸 氏
- NPO 法人マミーズ・ネット 理事長
中條 美奈子 氏
- NPO 法人かみえちご山里ファン倶楽部 専務理事
関原 剛 氏

コメンテーター

- 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局次長
末宗 徹郎 氏

コーディネーター

- 上越市創造行政研究所長・高崎経済大学名誉教授
戸所 隆

■コーディネーター挨拶、趣旨説明

戸所 隆



皆様こんにちは。ただいま紹介いただきました、上越市創造行政研究所で所長を務めております戸所と申します。これからのパネルディスカッションのコーディネーターを務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

最初に、先ほど末宗様から全国のお話がありましたので、私の方からはパネラーの皆さんからのお話をいただく前に、上越市の状況、人口状況等をお話しさせていただきます、それを共通認識としてパネルディスカッショ

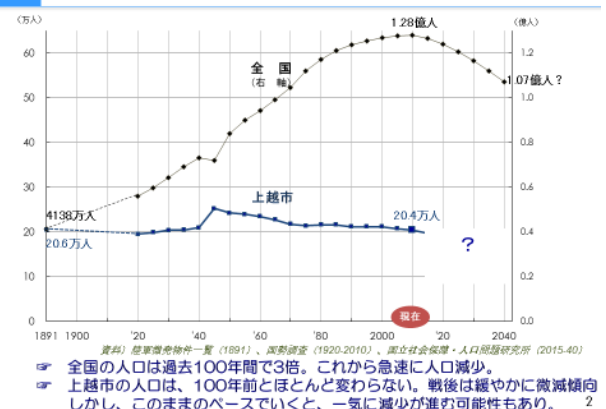
ンを進めていきたいと思えます。

今日の地方創生フォーラムは、「みんなで考える上越の未来～まち・ひと・しごとの創生を目指して～」で、上越市でも先ほどから話がありますように地方創生戦略を作っているところであります。研究所は中長期的な行政課題を総合的な視点からそれぞれの部局のお手伝いを側面的に行っています。そういった視点から、これまで合併を含めいろいろ活動してまいりました。

先ほど市長からも話がありましたように、上越市は14市町村が合併しまして10年になります。この間、上越市はそれぞれの地域の特性とか、地域の資源をいかしながら、人と人、人と地域、地域と地域のつながりを育むとともに、全国的に特異な都市内分権などで地域自治を図りながら地域連携、協働のまちづくりを進めております。今年度からは第6次総合計画に掲げました将来都市構想である「すこやかなまち・選ばれるまち、住み続けたいまち」を目指してまちづくりが進められていることは、みなさんよくご存じのことと思えます。合併で得ました上越市の都市力には非常に大きなものがあります。地方創生に関しましても、上越市内のそれぞれの地域が協力することによって、これまでできなかったことができる可能性が出てきました。これをどのように市民の皆さんの力を合わせて実現していくかが、今問われています。先ほど末宗様のお話にもありましたように、地方が独自に、地域が独自に考えた地方創生計画・戦略をつくる必要があり、上越市民の皆さんと地域創生について考えることがこのパネルディスカッションの目的です。

そこで先ほど全国的な動向がございましたが、共通認識を得るために上越市の人口動向について見てみたいと思えます。全国の人口はこの100年間で3倍ほど増え、

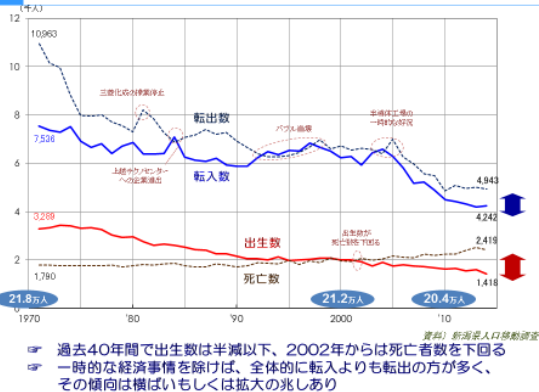
総人口の推移 (1891-2040推計)



現在、1億2千700万人です。しかし、上越はこの100年間であまり人口が変わりませんでした。

上越市の人口減少は二つの大きな流れがあります。自然増減という出生と死亡による増減と、社会増減という転出と転入による増減があります。上越市の社会増減はほぼ一貫して転出超過、所々で、例えば企業進出があった時などはちょっと社会増がありました。あとは一貫して社会減となっている。よそから来る人より出ていく人の方が多いということです。自然増減では、1995年辺りまでは生まれる人のほうが死亡する人よりも多かったのですが、2000年前後で逆転し、今日では亡くなる人のほうが多くなっている。現在は社会減、自然減が進行しており、このままでいくと上越市の人口は減ってしまおうというのが現状でございます。

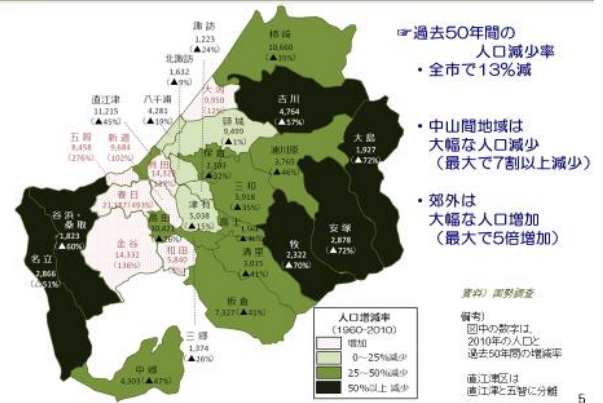
出生・死亡・転入・転出数の推移 (1970-2014)



人口が減少するとともに、人口の年齢構成も変化してきました。65歳以上の割合である高齢化率を見てみると、1960年では6%だったのに、現在では27%です。15歳未満の若い世代が減って65歳以上が増えてきている。働く世代も徐々に減っており、高齢化が進んできています。

地域的に過去50年間の変化をみると、春日とか都市部は増えてきている。ただ旧市街地の高田、直江津は減少、全体として中心市街地と山間地域は減少が激しい。こういった状況の中で、合併で得た力を活用して広い頸城平野からなる上越地域をどのようにこれから経営していくかが、今私たちに問われているわけです。そして将来の人口の推計もありますが、これから先のことは誰にもわからない。先ほどからお話がありますように、要は働く場ができて子供がたくさんできれば、人口は増えます。

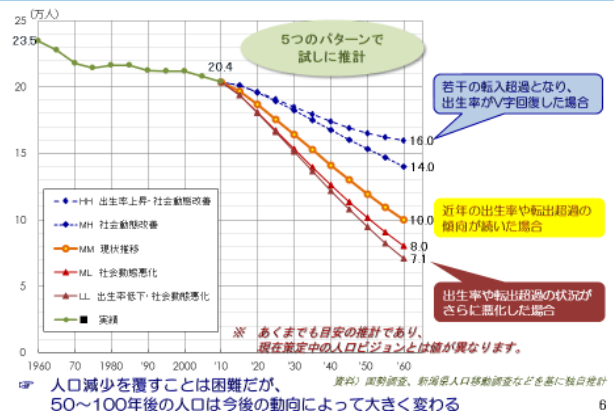
地区別に見た人口増減 (1960-2010)



人口をどのように増やすかということが、今問われているわけです。上越市も現在、まち・ひと・しごとを創生するための総合戦略を策定しています。その考え方はホームページにも出ておりますが、地方創生が目指すまちの姿、すなわち、まち・ひと・しごと創生の目的は、先ほどから出ているように、ひとりひとりが夢を持って、人口減少の緩和に努め、人口減少社会でも持続可能なまちにしていくことです。国全体の人口が減るなかで、今までも減ってきた人口を上越が何か行うことで急速に増えるはずはありません。人口減少社会の中で上越市をどのように維持、発展させていくかが今問われている。そのためには仕事をいかに創生していくか。あるいは、人をどう育てていくか。あるいは今までのように育てた人を外に出すのではなく、上越で活躍してもらおう、あるいは外から入ってもらおう。そのためには総合戦略の目標として、若者を育てるために選ばれるまち、住み続けたいまちの実現が必要となるわけです。

これから、まちづくりや子育て、しごとづくりの視点から上越の地域づくりにご尽力いただいておりますパネ

将来推計人口の試算結果 (1960-2060推計)



リスト 3 名の方から、それぞれ 10 分ほど活動状況をご発表いただき、それに対し末宗様から 5 分ほどコメントをいただきます。続いてまた 3 名の方から、活動を通して考えられた地域の創生に対してご提言といえますか考え方を話していただき、それに対しても末宗様に全国的な視点からコメントをいただきます。その上で会場から質疑応答をいただき、認識を高めたいと思います。さきほどご質問がなかったので、ぜひ活発な意見をお願いしたいと思います。最後に私の方から簡単に全体総括をさせていただきます。こんな形で進めたいと思っています。

2 時間近くのパネルディスカッションになりますけれども、皆様方のご協力をいただきながら進めていきたいと思っています。よろしくお願いします。

早速であります。まずは高波様からお話しいただきたいと思っています。高波様、よろしくお願いいたします。



皆様、いつもお世話になりましてありがとうございます。私の会社名「クオルス株式会社」でございますが、下門前にございます「トラットリア・ラ・ペントラッチャ」というイタリア料理店を経営しております、高波と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

私に頂戴いたしましたテーマが「しごとづくり」ということでお話をさせていただくのですが、すみません、着席でお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。



スライドの方に「上越発 田舎のイタリア食堂の挑戦」というタイトルがございます。

私がイタリア料理店を経営する上で、今こういった物語をテーマに私のレストランがございます。現在、上越市を拠点に新潟、都内、川崎と 6 店舗のイタリア料理店を経営しているわけですが、この全てが、先ほどのタイトル「上越発 田舎のイタリア食堂の挑戦」という物語

“上越を発信する”イタリア料理店



を演ずる舞台として存在しております。

なぜそうなのかということこれからお話していくわけですが、実は 1993 年に下門前にイタリア料理店を帰省してきて開いた折、お店の数を増やすことを一生懸命考えていた時期がございました。そうしながら今年で 22 年が経つのですが、ある時、ふと気づくのですが、きっかけとなったのは 1998 年にオープンいたしました南青山のお店なのですが、都内には非常にイタリア料理店が多くある中で、どうやって他のイタリア料理店との差別化を図っていったらいいのかということを考えました。上越発祥ですし、自分も旧安塚町出身なので、田舎者のど根性で上越・新潟発信できるようなイタリア料理店を展開するんだという方向性が見えました。

そのあとにいくつかのお店を開いていくのですが、どのお店も上越、または新潟を発信するお店として活用しております。一番直近の店舗では昨年 11 月にオープンしました銀座のお店なのですが、私が経営するお店の中では一番大きな店となりました。お店が 60 坪で 60 席ございます。このように 6 店のイタリア料理店を展開しながら、今、自分自身が非常に楽しくて、非常に充実した事業がございます。それは、上越の様々な農家さんとコミュニケーションを図り、私どもが欲しい野菜やお米、果実をたくさん作っていただくこと。これを都内のレストランに持って行って新潟上越産トマトのなにそれというメニュー名でお客様にご紹介します。意外にも新潟出身や上越出身の方がお店にいらっしゃるものから、「上越のどこ?」「板倉です」とか「上島です」とか紹介しますと、「あーそこに親戚いるんだよ」とか「そこにいとこがいるんだよ」とかいう話になりまして、非常

に私のお店のスタッフもですね、全員が上越出身というわけではありませんが、非常に彼らも協力的で、この地域の食材を一生懸命宣伝してくれる状況であります。

今年大がかりに取り組んだことでは、ある農家さんにもともとはイタリアの加熱用のトマトなのですが、加工用として、これを一度煮て缶詰を作りたい、そうすると一年を通して上越発信できるんじゃないかというところまで、それを思いつきました。ただ、一回の製造に 1000kg ですとか 2000kg の量が必要なものですから、一農家さんだけではなかなかそれを賄っていくことは難しいということで、今 6 軒の農家さんに同じ品種の同じトマトを作っていただいています。ただそれをいっぺんに収穫できるわけではないので、少しずつ毎日色がついたものを冷蔵ストックしていただいて、ある程度たまった段階で加工所に持ち込んでいただき缶詰にする、といったようなことを今年に取り組んでおります。



その農家さんたちといろいろなコミュニケーションを図る中で、例えば「農協さんや大手スーパーさんには 1kg あたりトマトはいくらくらいで売ってらっしゃるのですか?」と聞くと、驚くほど安い値段でびっくりしまして、「だったらその価格の倍の値段で私どもは仕入れます」と言うと、農家さんは非常にびっくりされた様子で、「そんなんであんた商売になるのか」とご心配になられるのですが、実はレストランって、トマトの料理一皿で、800 円、1,000 円お金を頂戴できます。ということは、原材料費は業界相場的には 25%から 30%の原価率がかけられるので、トマトをスーパーさんや農協さんの倍の値段で買うことは可能です。それを紹介すると農家さん

からも非常に喜びいただきました。同じようなことを、例えば地場の越の丸茄子ですとか、または板倉のいちじく、大潟のいちじく、三和の北代あたりの栗、そういったものを農家さんと協力して、私のレストランでまず使う。そして、いろいろな調理方法でどのような加工に向くのかというのを、プロの料理人がアイデアを生んで、将来的には農産物を加工品として一年通して上越を発信できるようなツールとして開発していきたいなと思っております。

農家さんを端々に回って行きますと、おじいちゃんやおばあちゃんが実際は携わっていて、後継ぎの心配をされる方が多いのですが、せがれや娘はいるんだけど後は継いでくれないみたいなんだとか、そういった話を方々で聞きます。面白い仕事だったり、楽しい仕事や、儲かるのだったらやってみたい、後を継いでみたいという方が生まれたりいいなと思って、それに取り組んでおります。同じような農業の話ばかりになってしまうのですが、イタリアでもブドウ栽培の農家さんとかお米栽培の農家さんも同じく後継者さんがなくて、中国人の投資家を買われてしまったりですとか、またはその代で畑や田んぼが荒れてしまったりとかいうのはあります。そんなことも直面いたしましたので、イタリアでもブドウの栽培を委託しております。で、オリジナルの自分たちのワインを作るということで、そういったブドウ畑もイタリアで活用している最中でございます。

今、事例1でご紹介しております“楽しくて儲かる農業”というのが、僕が今一番力を入れて、まずこれを形にするんだということやっております。月に一度、東京からわざわざ新潟上越にシェフたちを集めまして、この時期は各地で農作物が直接見て取れるので、栽培の現場に行って農家さんとコミュニケーションを図って、いろいろな日頃の苦労だとか、栽培に関する工夫とかを聞く機会を設けてやっております。

(戸所)

どうもありがとうございました。「しごとづくり」の視点からお話いただきました。上越の地域資源である食材を活用し、うまく流通させることによって付加価値をつけ、新しい食文化を創生されています。高波さんをモデルにやってみようという人たちも出てくると思いま

す。イタリア料理と言いながらこの地域の食材で日本的なイタリア料理、日本人の口に合う、また上越の人の口に合う、それをまた全国に発信する中で、上越地域の持続的發展に寄与する事例をご紹介いただきました。

次に中條さんにご発表いただきます。

■事例報告②「結婚・出産・子育て」

中條 美奈子 氏



こんにちは。認定NPO法人マミーズ・ネットの中條美奈子です。よろしくお願ひします。こんなたくさんの方の前で、しかも地元上越で話をするチャンスをいただいて本当に嬉しいのですが、ちょっとドキドキしております。よろしくお願ひします。

マミーズ・ネットは、1996年に育児サークルの連絡会としてスタートしました。その段階で、私も子育て真っ最中のママでした。2004年にNPO法人になり、2014

子どもも 私も 大切に

子どもの幸せを願うすべての人々が、地域で支え合って子育てできる社会をめざします。

認定NPO法人

マミーズ・ネット

info@mammies.jp
http://www.mammies.jp
〒943-0882 上越市中田原1
TEL・Fax 025-526-1099

中條美奈子

これまでの歩み

- ◆1996年 上越の子育てサークル連絡会として「マミーズ・ネット」発足
- ◆2000年 5年間にわたり文部科学省事業受託の中心団体として活動
～2004年
- ◆2004年 NPO法人マミーズ・ネットを設立
- ◆2006年 内閣府地域活性化事例研究事業受託
- ◆2007年 子育て応援ひろば「ふっ」開設
上越市よりこどもセンター運営受託
- ◆2008年 第2回よみうり子育て応援団大賞
選考委員特別賞受賞
- ◆2011年 上越市ファミリーサポートセンター
移動ひろば6か所を受託
- ◆2012年 子育てinfo 事業開始
- ◆2014年 認定NPO法人となる

子育て中の人たちの
声を
社会に届けたい！



2

年には認定NPO法人になっています。常に子育て中のママたちが活動の真ん中にいます。私はもう20年近く経ってしまいましたが、今でも活動の中心は乳幼児を育てるママ達です。

私たちの活動のスタート時点で、すでに世の中は少子化の問題の中に入っていました。1994年のエンジェルプランが日本の少子化対策のスタートだと思いますが、これがちょうど始まっていた頃でした。その当時、様々な少子化対策の話合いの場で「今の若い女の人がわがままで子どもを産まないから子どもは減ったのだ、そんなに支援してくれと言うなら、あなたたちがあと一人で子どもを産め」と言われました。その時の頃から思うと、今日お話しを伺いながら、時代は動いたなあ。私たちが当時から心配していたことが、伝わったのだなと思ひながら、今日のお話を伺っていました。

私たちは、今子育てしている人たちが本当に幸せだったら、必ず次の世代は続いていくと思っていました。希望が叶えば、合計特殊出生率は1.8ということですので、ぜひ希望が叶う世界になってほしいと思います。ただ気

1996年から思ってきたこと

すでに少子化が問題となり、様々に議論され始めていた。私たちの実感として、「今時の若者」に問題があるのではない・・・

今、子育て中の人たちが幸せなら、必ず次の世代が続く。

子どもか、キャリアかの二者択一を女性は求められてしまうことを変えていきたい。少なくとも我が子が大人になる頃までには・・・

を付けなければいけないのは、希望を強制してはならない。あなたが何人産みなさい、という方向にはならないで欲しいな思いながら、自分たちが言われたことなどを思い出しつつ聞いていました。

また活動当初から、女性が子どもかキャリアかの二者択一を求められているようでは辛い、それを変えたいと考えています。少なくとも自分の子ども（当時は赤ちゃん）が大きくなる頃には変えていたいなと思っていたのですが、願っていたように変わったのだろうか？と思います。

マミーズに集まった子育てママたちは最初から「上越の子育て環境をよりよいものに」という大きなテーマを持っていました。そのために自分たちができることをやってきたのですが、やりながら、これは大事にしなきゃいけないと思ったのが、パパも子育てできる社会にしたいということ。そのためにはワークライフバランスの実現をめざしたい。

あとは、ママもいろんな力を持っています。子育て中の母親だからできないだろうとか、母親だからそれをやっちゃだめとか制約があるのは良くない。子育て中の人たちの社会支援、子育てをする人に向けた支援、及び子育てを支援する人に向けた支援、両方大事に活動してきています。

上越の子育て環境をよりよいものに

パパも子育てできる
||
子育てがママだけの
役割にならない

ママもいろんな力を
もっている

子育て中の人たちの
社会参画支援

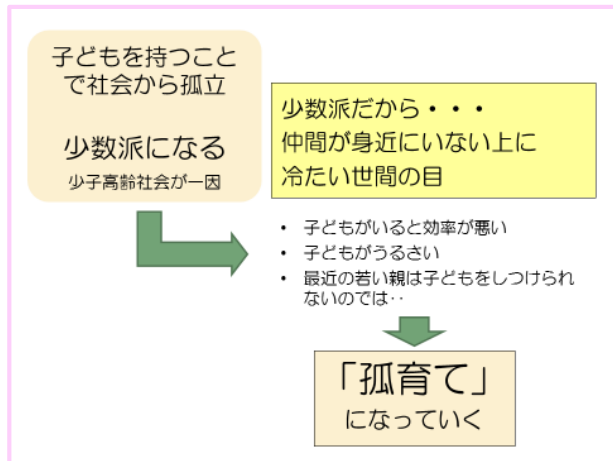
ワーク・ライフ・
バランスの実現を！

- 子育て中の人に向けた活動
- 子育てを支援する人に向けた活動

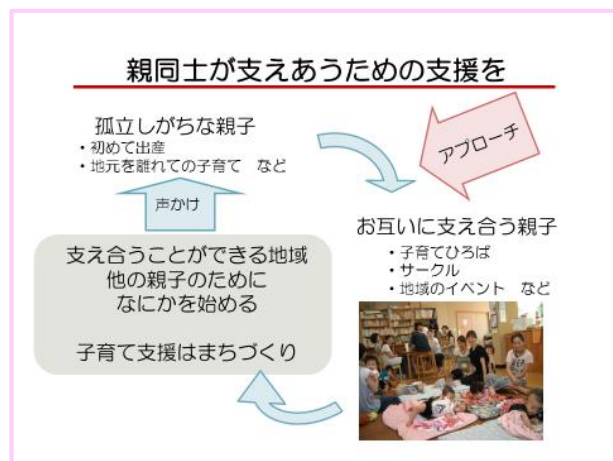
両方大切 4

今子どもの数が減ってしまいましたので、子どもを持つと少数派になります。少数派だから分が悪いのですね。仲間が身近にいないし、世間からは数が少ないと冷たい目で見られます。結果、孤育て、孤独の「孤」育てになっていくのかなど。そしてまた、子どもの数が減ってし

まうと地域の力が弱まってしまいます。普通にできていた助け合いというのがなかなか難しくなりました。そんな中で、親としては必要以上に自分だけで頑張らねばと思ってしまったり、または、支援を受けて当然だという方向に動いてしまったりする。地域の力が弱まった今、私たちは新しい地域の力を作っていきたいと考えています。

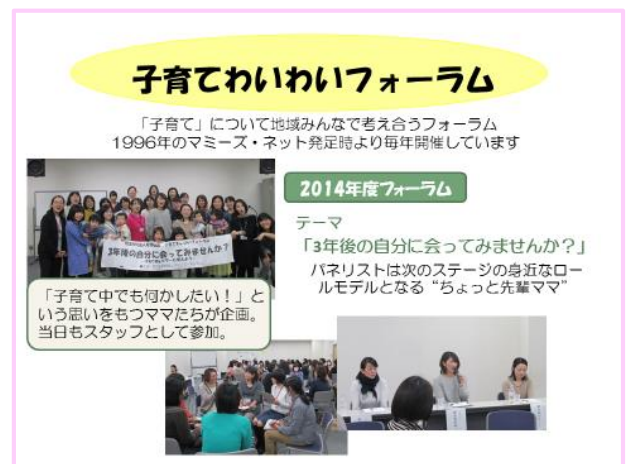


私たちの活動は、新しい地域の力をつくり、共に支えあう子育てを実現していくことだと考えています。子育て支援を考えると、親たちを単なる支援の受け手にとどめてはいけない、親同士が支えあうための支援が大事だと思う。子育て中の人たちを単なる受け手にとどめてはならない。さまざまに社会で活躍してきた人たちです。ただ、地域での活動経験がないのです。学校を出て、会社に行って、地域社会を経験せずに親になります。子育て期は初めて地域での活動を体験するチャンスになります。地域とつながること、誰かのために何かすること、それはどんな感じなのかということを経験して



もらいたいと思っています。初めての出産だとか地元を離れての子育てとかで最初は孤立している人たちに、何らかのアプローチがある。その人たちが広場に行くとか育児サークルに入るとか、地域のイベントに行ったりとか、そんなきっかけでお互いつながり始めれば、今度は自分がほかの親子のために何かしてみようと考え出します。地域での体験が良いものであれば、今度はその人たちが支える側に回って行きたくなる。この循環を回していきたいと考えて活動しています。

いろいろ行っていますが、活動の循環がうまくいったという例で、昨年の「子育てわいわいフォーラム」があげられます。子育てわいわいフォーラム自体は1996年からずっと続けてきているのですが、一昨年ちょうどこ



の会場で行ったわいわいフォーラムに参加した人たちが、じゃあ来年は私たちがやりたいということで、「マミ茶」マミーズに興味がある人たちのお茶会という会ができました。その人たちが中心になって2014年の子育てわいわいフォーラムを企画しました。写真に写っているメンバーです。「3年後の自分に会ってみませんか？」というテーマです。高名な講師の先生はいらない、自分たちのちょっと先輩の話が聞きたいということで、キャリア継続をして地元で働いているママ、途中から上越に結婚でやってきて、全然違う分野で資格を取って活躍し始めたママ、それから、専業主マだけど地域で活躍しているママ、3人の話を聞くということを行いました。

計画から当日の運営、全部、今子育てをしているママたちがやってくれて、ああこうやって循環していくんだなと思って、私としては感動しました。

自主運営

子育て応援ひろば ふう

「子育て中の人と子どもと一緒にでかけられて、
ゆっくりと自分の時間がもてる場所」

をめぐして、2007年4月に開設

親の自己実現の必要性

- 幸せな親から幸せな子ども
- 地域を支える人材の育成につながる
- 次のライフステージへの準備期間

親支援



オープンスペース

本を読んだり、お茶を飲んだり、おしゃべりしたりプログラムが自由に過ごす日

子育て中の人々が幸せであるために、居場所があるということで、子育て応援広場「ふう」を開設していますが、ここでも親支援に力を入れています。だから利用者は単なる受け手ではとどまらない。ここにきたら運営にも参画してもらいたい。何か得意なことがあればそれを生かして講師をしてもらおうとか、企画のアイデアをもらおうとか、その場その場で活躍してもらっています。

下の写真なんですけど、「ふう」のキャラクターがいるのですが、「ふうのキャラクターのパン作ってきた」と言って持ってきてくれるママがいたんです。できる範囲でちょっと参画してもらって、人のために何かをしようと気持ちいいなと思ってもらえればと思っています。

「ふう」に利用者さんが参画

- くらぶ活動
利用者さんたちの発想から誕生
- 利用者さんが運営に参加
利用者さんとミーティングを開いて来月の予定を決める
- 「ぶちさんスタッフ」活躍中
子どもをつれてスタッフをする



あと、企業に対して子育てについて理解を深めてほしいなと思ひまして、企業に出かけて行って子育て講座を行っています。子育て中の従業員には、忙しいパパママがしっかりと子どもにかかわるためにはどうすればいいかを子育て世代以外の人たちに子育ての現状を伝え、パパママはこんな状況で頑張っているのを協力していこう

と理解し応援していただくための講座を行っています。

アウトリーチとしての企業講座

- 就業時間内に、会社内でおこなう、従業員に向けての子育て講座
- 当初は「父親」の受講が主になると考えたが、実際は社員全員で受講する企業もあった。



「社会みんな」が参加することに

企業講座参加者の声

- 子どもに対する接し方は他の人にも通じるものがあった。
- このような講座は初めてで、楽しかった。
- コミュニケーションの取り方がとてもよく理解できた。

12

あとは、世代を超えた関係づくり。大学生や高齢者の方にボランティアに入ってもらっています。それから子育て情報の発信。地元密着の子育て情報を、上越で子育てしているママたちが編集会議を開いて、発信していくということをしています。

世代を超えたつながりをつくるボランティア



シニア地域活動参画
促進事業を、中間支援NPOと協働

子育て情報の発信

～子育てをより楽しむために～

地域の子育てに関わる情報を収集・発信



- ◆ じゃえつ子育て応援誌 With Kids の発行
- ◆ With Kids News 年4回の発行



- ◆ 地元ケーブルテレビ (JCV) 「子育て応援団」の企画参加
- ◆ イベントカレンダーの制作

14

それから、ママたちが働き続けるためには、パパも一緒に子育てしていくことになりますよね。一家が子育てをしながら、いかに地域で楽しく暮らしていけるかというのを考え「上越子育て info」事業を行っています。一人一人の家庭の状況や働き方などを聴きとり要望に応じて、子育て支援を個別にコーディネートするということを行っています。

「じょうえつ子育てinfo」

地域連携 NPO法人と市や地域との連携を強化し、子育て世帯を総合的に支援する

一人ひとりの家族の状況や働き方の希望に応じて、子育て支援をコーディネート

↓

オーダーメイドの子育て支援

こどもセンターにスタッフが常駐し、来所、電話、メールでの問い合わせに対応



これは市と連携して始めた事業ですが、今は、子ども子育て支援新制度の「利用者支援事業」となっています。また今回、県の少子化対策モデル事業として「子育て応援ちょこっと」を行います。フィンランドのネウボラも参考にして、ちょっと心配なことが話せたりだとか、慣れた場所でちょっと預かってもらえたりだとか、子育て中のSOS、困ったから誰か助けてみたいなときに応援隊が行くような、そんなことをやってみようかなと思っています。今年度10月から、今計画しているところです。

子育てに時間的精神的ゆとりを

地域ができるネウボラ型支援プロジェクト
新潟県少子化対策モデル事業として今年度から29年度まで実施

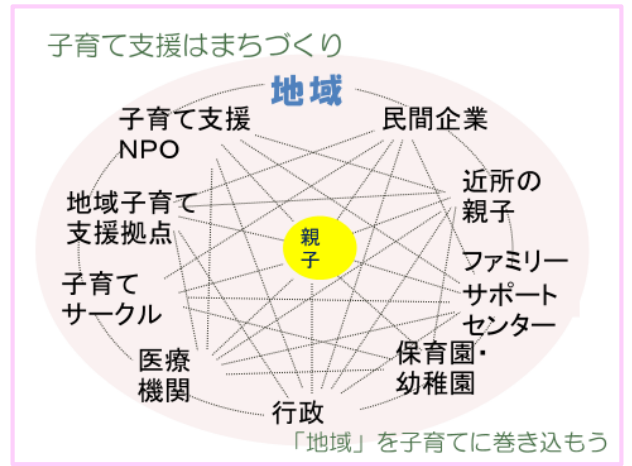
「地域の助言の場」を開設

+

慣れた場所でちょっとの預かり

+

子育て中のSOSに応援派遣



時間がなくなりましたが、これだけは！「サケの遡上」を目指せ！と思っています。子どもを産み育てるなら故郷上越で！ということ。18歳になると上越から子どもは出て行ってしまふことが多いのが現状です。でも自分が子育てをしようと思った時に、やっぱりあの故郷で子育てをしたいと思って帰ってきてくれるような、そんな“地元”を作っていきたいなと思って活動しているところです。

目指せ！「サケの遡上」
子どもを産み育てるなら故郷上越で

18

(戸所)

どうもありがとうございました。最後に「サケの遡上」のお話がありました。実は私、40年間、京都の立命館大学と高崎経済大学で教員をしておりました。この両大学にも上越から結構学生が来ています。私は上越をはじめ全国から集まった学生たちに、できるだけ地元で就職せよと言ってきました。先ほど子育て期に親が地域とつながることの重要性が話されましたが、故郷に帰る学生

の親の多くは地域とのつながりが強いと感じています。
 そうした親のところへは帰巢本能が働くのですね。まさに
 “サケが遡上する” “鮎が戻る”、そういうことだな
 と思ってお聞きしました。どうもありがとうございました。
 次に関原さん、お願いします。

■事例報告③「まちの活性化」

関原 剛氏



はじめまして、関原です。到底 10 分で喋るのは不可
 能なので、ブツツと終わりますけど、そしたら紙を読んで
 ください。時間がないのでとっとと行こうと思います。
 よろしくをお願いします。

言いたいのはですね、「クニ型NPO」、まあ新しい
 言葉なんでしょうけれど、そういうものももしかしたら
 近未来に効果をもたらすのではないか、ということです。

「クニ」型NPO
 その機能と近未来の効果
 そのための人材育成拠点の
 重要性について

2015
 NPO法人・かみえちご山里ファン倶楽部 / 作成・関原

「クニ」とは
 任意で設定された
 集落の集合体であり
 自給的な生存様式を残存させ
 自主的な組織と運営能力を持つ
 自立的コミュニティとする

うちのかみえちご山里ファン倶楽部という中山間地の
 振興型のNPOは、13年くらいやっているんですけど
 も、じゃあこの13年で一体何が起こったのかというの
 を、あと9分20秒くらいで説明したいと思います。

まず「クニ」という造語なんですが、これは任意で
 設定された集落の集合体で、日本国に楯つこうだとかテロ
 の団体ということではない。気概を持ってやるというこ
 とで、自給的な生存様式を残存させ、自主的な組織と運
 営能力を持つ、ここの所が大事なんです、自立的コミュ
 ニティとするという定義です。

できたのは2002年、今の会員数は300人、地域内30
 %、上越市内30%、大都市圏30%、次が重要なんです
 が、給料もらって働いている若いのが8人います。今年

かみえちご山里ファン倶楽部・組織概要

- 設立年 2002年
- 会員数 約300名(2015現在)
 地域30%・上越市内30%・大都市圏30%
- 常勤スタッフ数 8名(2015現在)
- 塾生 1名
- 年間予算 約3,500万円
- 活動地域集落数 25集落
- 活動地域定住人口 2000人程度

から地域再生の学校を始めて、学生がたった1人ですが
 います。年間予算がおおよそ3500万、活動地域集落が25
 集落、活動地域定住人口は2000人。ここでも大事な
 ですが、2000人というのは住民票の上の数、この人た
 ちの多くは昼間いなくなります。ですから集落を考えると

守る・深める・創造する

■守る

1000年以上続いた「口伝」の生存技術を調べ・記録し復元する——<地域資源調査>

■深める

それら技術をノスタルジアで博物館化せず新たな時代の価値づけの中で合理的なものとして再評価する——<地域資源の分析>

■創造する

それら地域資源を既存のまま使うのではなく、新たな組み合わせにより新しい価値を創造する——<地域資源の新生・創生>

きには、昼間人口と夜間人口でものを考えること、統計だけの数字じゃ読めないというのがございます。

守る・深める・創造するということを目指してやってきまして、まずは地域のずっと続いていた資源の調査をやる。それからそれをただ調べるんじゃなくて、なつかしいねとかではない新しい時代の中での価値づけをやっていくということですね。3番目は、何か創るんです。新しい、主に産業にかかわることですね。

やってきたことは山ほどありまして、いちいち言ってもらえないのですが、生存技能の調査、森林公園の委託、これ上越市と共同です。環境学習学校の委託、棚田の維持、民俗調査、子供のUターン教育、予防福祉、米の直販、地域資源産業の調査、やめりやいいのにカフェやレストラン、挙句、旅館。食品加工場、生活デザインミュージアム、地域再生学校。これはですね、月見団子のようなもので、個別、一つ一つの事例であって、大事なものはこれではない。

実はこれらをもたらした原因というのが、すべての基盤になった何か、つまり、新しい共同体の形がそこに存

多様な活動



実は基盤が重要

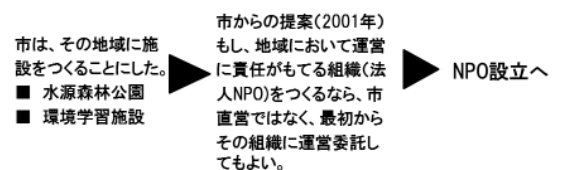


すべての基盤・新たな構造の共同体
(内・外 混血の組織)

在したから、こういうことがぱらぱらと現象として出てくるということで、団子の方ばかりに目をとられてです、下のお皿の方を見ないというのがよろしくない。お皿の方が大事。でき方の特徴なんです、まず、行政との協働は確かにありました。

水源森林公園とか環境学習学校を作ると市が思っすね、市から、その地域において責任が持てる組織を作ったならお前らに最初から任せてやってもいいよ、というご英断があったということで、その場所に責任を持つとする地域団体にアドバンテージを与えるということが先行して行われたのが、設立に大きく役立ったのです。

■ 設立の動機 2000年頃「行政との協働」 NPO設立へ 発意の発生①



- 市からの受託により、組織運営の基礎経費を確保
→若者雇用の最低基礎資金の確保
- その場所に責任を持つとする地域団体に「アドバンテージ」を与える。

次、今度はアンケート。危機調査。全戸に「生存技能アンケート調査」をやりまして、皆さん素晴らしい技能を持ってるんですが、それがどうやらあと 10 年くらいで全部消えるという調査結果が出ました。このように集落の技能や何かをあとどのくらいで消えてしまうのかという、直接的な、しかも冷酷なデータをチャートで示すことで危機意識が喚起できる、座して死を待つか、ジタ

バタするか二択あるがどちらがいいですかといった時に、ではジタバタするといってNPOが始まったわけです。この切迫した事実を明らかにするということが非常に重要。

■ 設立の動機 1999~2000年頃 「危機調査」
NPO設立へ・発意の発生②

地域全戸への「生存技能アンケート調査」
630戸 回答率30%

その結果、多くの生存技能が、あと10年で、ほぼ消滅する事実が発覚。
結果をレッドデータ化し。住民に示した。危機意識の発生。「昨日と同じように明日があるわけではない」

▶▶▶ NPO設立へ

- 冷静な「事実のデータ」の提示。危機の意味の提示。危機を打開する猶予限界時間の提示。
- 自分たちの問題として、その切迫した事実を明らかにする。
→地域内から発起人80名が参加。

僕らが活動したころは、かつての集落の活動性よりも、ぐっと縮小した活動性しか持っていない。やっぱり谷同士、集落同士の行き来が非常に薄くなっていましたし、隣近所ですら行き来が少なくなっていた。昔はまとまりのある、谷ひとつとしての生存権を持っていたんですが、今は、もうバラバラの集落群になっているわけです。

■ 2001年以前（山里NPO設立以前の状態）

かつての集落の活動性
縮小した活動性

過疎により、集落ごとの活動性が縮小し、かつては頻繁だった相互の行き来も減少した。かつての、まとまりのある「集落群」としての「谷」は希薄化していた。

NPOができて、専業の若者たちが常勤していつもそこにいて、という状況により何が起きたかという、バラバラの集落を結ぶ「ひも」のような役割をもたらした。珠+ひも=数珠になる。いくら集落一個ずつがいいといってもですね、一本のひもがなければ連動するものにはなれない。かつての広い生存権の形の復元ができないということで、若者がひもになったことの意味が非常に大

きかったということです。これはもう革新的なものだった。

■ NPO設立 2001年~
NPOの専業事務者(若者)による「つなぎ」の発生

「かつて運動していた地域」の蘇生
「ひも」の役を果たす若者

山里NPOの専従職員である「若者」が、「ひも」になれる理由は「村に対して何の前科もない」こと。誰に対しても公平に接することが出来ることの意味は大きい。

縮小しバラバラだった集落集合体が徐々に復元されてゆく。それにより、有効な地域再生活動が実施できるようになる。
鍵は、責任ある組織の発生と、常勤の若者【ひも】の発生。

珠+ひも=数珠(連動するもの)

10年間の活動で見えてきた本質
関係性の再生

個人と個人
個人と集落
集落と集落
都会人とムラびと
行政と村落集合体
大学などと村落集合体

見えてきたのは、結局集落を基盤から何とかしていく上で大事なものは、関係性の再生だということで、「と」の部分があります。個人「と」個人、個人「と」集落、集落「と」集落、都会人「と」ムラびと、行政「と」村落集合体、大学など「と」村落集合体。この「と」の部分を実践する技能がないとあるから、その後の集落の未来が決まるということです。

媒介性
クニの内と内、内と外、外と外の中間にあってとりもつ機能

媒体性
クニを媒介するための手段・方法・仕組み

編集性
クニの事象を取捨選択して明確な核心を表示すること

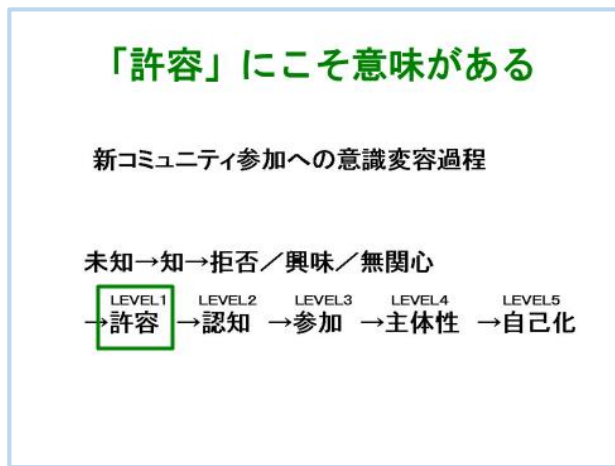
翻訳性
クニの語法、行政用語、学術用語を相互理解可能にすること

意識性
クニの中の声なき声、無言の言の意を汲み言語化すること

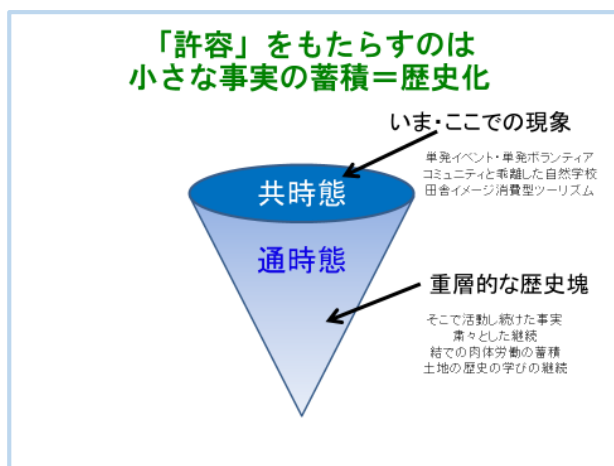
その若者たちは何をしてくださいますかと言ったかという
と、つなぐために媒介性、媒体性、編集性、翻訳性、意
識性。これ面倒くさいんですが、いちいち言いませんが
字を読んでいただければと思うんですが、この5つのつ
なぎを全うしてくださいということを要求するわけです。

さて今度は、ムラの方の意識変容なんです、すぐこ
ういうことをやろうとすると、参加することだとか、主
体側であるということを要求してそればかりを強調され
るんですが、実は「許す」ということ。

そこでそういう団体が活動していることを「許す」と
いう気持ちが実は大事で、この「許容」をどういう風に
作り出せるかということが重要。

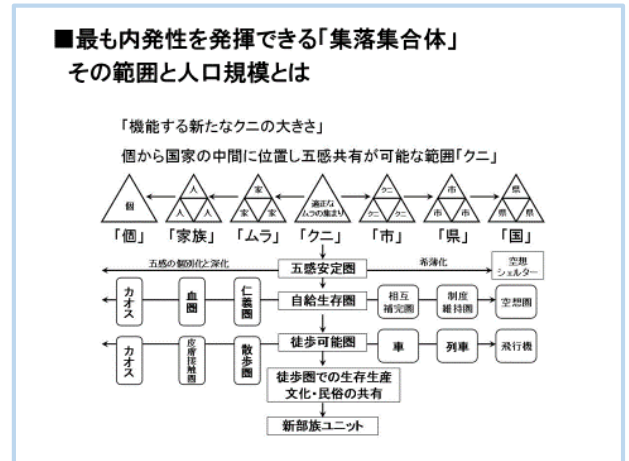


今ここで起こっている現象っていうのは、いわゆる共
時態で起こっているということで、イベントとか単発ア
ートフェスティバルとか、そういうやつはみんなこう共
時態で行われていることなんです、ムラの中で、許容

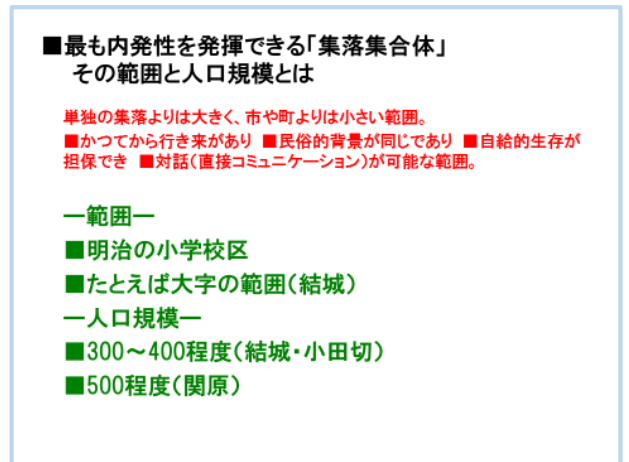


をもたらすのは実はこの通時態の中で、重層的な歴史の
中でやり続けてきた形を見せ続けるということではかそ
ういう信頼は湧いてこない。

従って、一朝一夕にはできないですが、ともするとこ
の共時態のイベントばかりが話の趣上にのぼるというこ
とは本末転倒、というふうに思います。



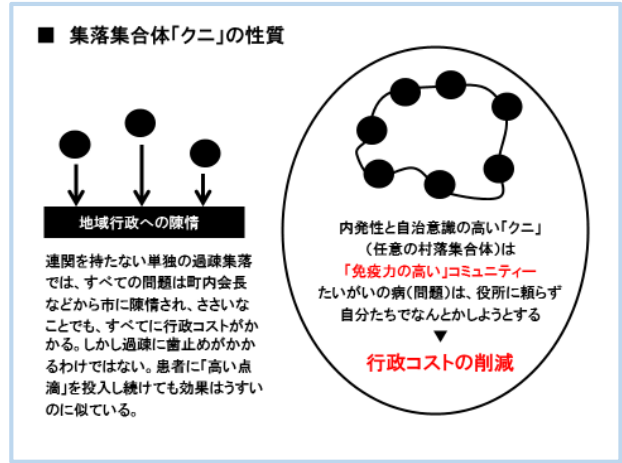
これは図を見てもらえればわかるのですが、村ではなく
て集落だと思ってください。一個の集落よりは大きく、
市よりは小さい。どうもそのあたりに都合のいい大き
さがあるのではないかと思います。この大きさなんです
が、我々が我々の感覚的には、単独の集落よりは大き
く、市や町よりは小さい。かつてから行き来があり、民
俗の背景が同じで、自給的生存が担保できて、最後大事
です、直接対話ができる。個人間コミュニケーションが



成立する。例えば範囲でいえば、明治の小学校区ある
いは大字の範囲。これ結城登美雄さんですね。人口規模
でいうと 300~400、これは明大の小田切さんもしくは結

城さんが言ってまして、私は500程度じゃないかと。大事なのは100の違いではなくて、おおよそこんなものとみんな思っているということです。この300とか500くらいの塊をもう一度再生することで、内発的な自治がもしや生まれるのではないかという。その構造は何かを考えなきゃいけない。

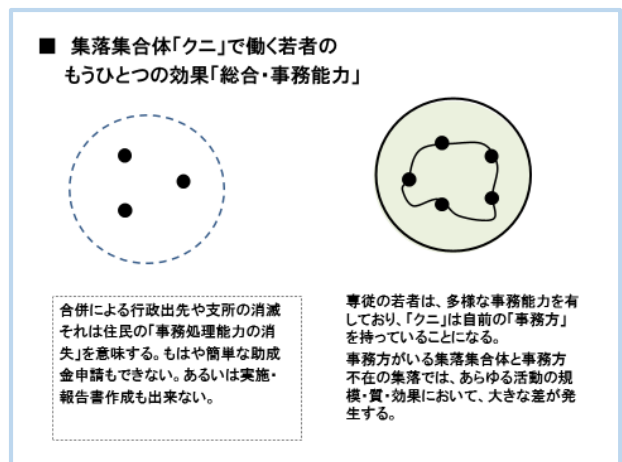
現在ですと、町内会とか山奥だと3人とか4人とかいうところもあって、大きくても50人。その次いきなり20万の上越市になるんですが、その中間にちょうどよい、私たちと感覚的そらざらしくなく、閉塞性も持たない、ちょうどよい大きさの自治の規模が策定されていない。これがないのが非常にづらい範囲。ないならば任意で範囲を決めりゃいいじゃないか、ということになりました。



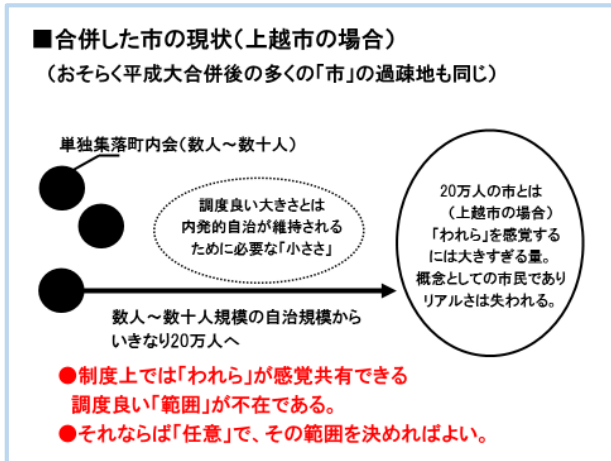
自然に出てきたというのが非常に重要です。バラバラの町内、町内にひもがない状況なわけですけど、町内に起こる問題、現象っていうのは、全部役所に陳情してすべてに行政コストがかかるわけです。

ですが、内発的な、自分たちで何とかしようというひもが通った数珠状の範囲ができれば、いわば免疫力の高いコミュニティとして、だいたいの問題は役所に頼まないで自分たちで何とかしようします。これは取りも直さず、最終的には行政コストの削減につながる。

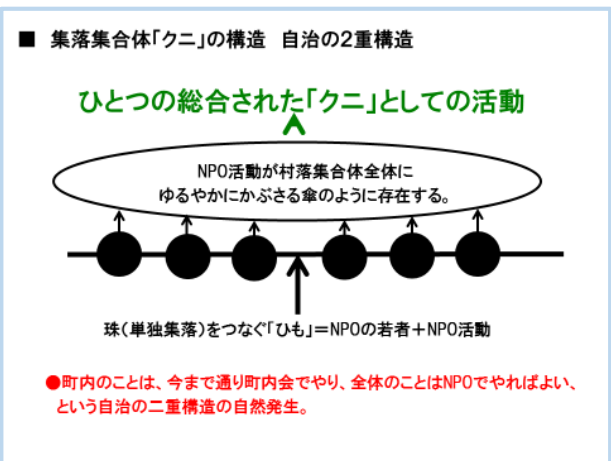
合併による、合併っていいこといっぱいあるんだと思うんですけど、ですが一つ辛い点は、行政の出先機関に支所が消滅した。これはですね、住民たちが事務処理能力を失ってしまったということです。結構ムラの方々は、役所の兄ちゃん姉ちゃんに頼んでいろんな事務をしてもらった。総合事務処理能力を再び取り戻すことができれば、非常に活発なものになるのではないかと。



そこで、図のように数珠状になって、もう一回かつての形を復元することができれば、素晴らしい。というこ



今、町内会がパラパラとあるところに、若者たちがひもの役割であるようにつないでいく。で、町内の中から有力な方に理事をやってもらって、全体のことはNPOで考えりゃいいし、町内のことは町内で今まで通り考えりゃいい、ということで、自治の二重構造のようなものが



とで、事務方代務集団と事務方不在の集落集合体では大きく違う、ということです。次、第2部になりますね。以上です。

(戸所)

どうもありがとうございました。お話をお聞きしまして、地域づくりはひとつづくりであり職場づくりであることを再確認しました。

そうしましたら、末宗様にお三方へのコメント、ご感想をよろしく願います。

■事例報告についてのコメント

末宗 徹郎 氏



それぞれに地域で素晴らしい活動をされている方々のお話を聞き、感銘を受けましたので、ちょっと感想をお話しさせていただきます。

まず「しごとづくり」の関係で言いますと、まさに高波さんのおっしゃった、楽しんで儲かる農業をどうやって作っていくのか、ちょうど私共の地方創生の戦略でも、特に農業分野については一番の課題に掲げております。若い人の地域就農者をどうやって出していくのかというのは、いくらやりたいと思っても、やっぱり儲からないと若者もなかなか来ないわけなんで、今お話にあったようなイタリアの加熱用トマトの栽培とか、高付加価値にして農家の人の収入をアップしようとする。これがもっともっと他にもさらに広がっていけば非常にいいことだ

ろうなと思いますし、今度は東京にある高波さんのお店に行ってみようと思います。上越の味をですね、味わいたいなというふうに思ったところでございます。

それからその次の子育て関係で、マミーズ・ネットさん、格闘されているなというふうに思ったわけでして、特にこの中で、地域力の弱まりをどうカバーしていくのかっていうのは、これ、子育てに限らずそうなんですけど、さっき冒頭の講演でもお話ししましたが、出生率が高まっているところは、地域コミュニティがしっかりしているところが多いんですよね。それで、NPO活動とかもあるし、もっと自治会や町内会みたいなところが強くなればというのもありまして、これからの子育て関係は、なかなか行政が全部をカバーするというわけにもいかないんで、こういった方々の活動というのはすごく大事だと思います。しかも特に行政側が言うよりは身近な方が、「3年後の自分に会ってみませんか？」という方が説得力がある話だと思います。どうやってそれを、押し付けではなくて自然体の形でNPOの方々が横展開をしてやっていくか。今度はそのマミーズ・ネット以外でもこのネットワークを広げていけるかというのが、大変大事なことなのではないかと思って、聞いておりました。

それから3点目のまちづくり関係で申し上げますと、素晴らしいと思ったのが、全戸へのアンケートをやって冷静な事実のデータをもとに、危機意識を共有化したということだと思うんですね。

今、私もいろいろと市町村から地方創生をやらうとしている中で、いろいろご相談を受けたりします。往々にして、小さな市町村の方が熱心です。ある程度人口があるとか、まだまだ増えているところは、まだ先の問題だということなんですけど、小さな町村の方が真剣になっていろいろ知恵を絞って、ご相談に来ます。やっぱり一番大事なのは、市町村を構成している集落っていう一番の足元が、どうやって自分たちの集落を維持していくか、あるいは活動を見い出すか、っていう草の根のところが大変なんです。そのためには、危機意識を共有する。その中で、じゃあ自分たちでこれからできることは何だということを見い出していく。それがやっぱり内発的でない、いくら上から集落の方に補助金を出しても、それがなくなったら終わってしまうんだと思うんですね。そういう意味の活動してるところって全国でも他にもいっ

ばいあるわけですし、今のようなお話が上越の方でもあるというのは、大変聞いていて心強く思ったところでございます。

(戸所)

どうもありがとうございました。

今いただきましたコメントを踏まえながら、これからまた3名の方にお話しさせていただきたいと思っております。すでにいろいろなお提案をいただいておりますけど、上越市の活性化についての提案なり、あるいは考え方を3名のパネリストの方からお話いただければと思います。最初に高波様、よろしくお願いします。

■上越市の活性化に向けた提案①

「しごとづくり」

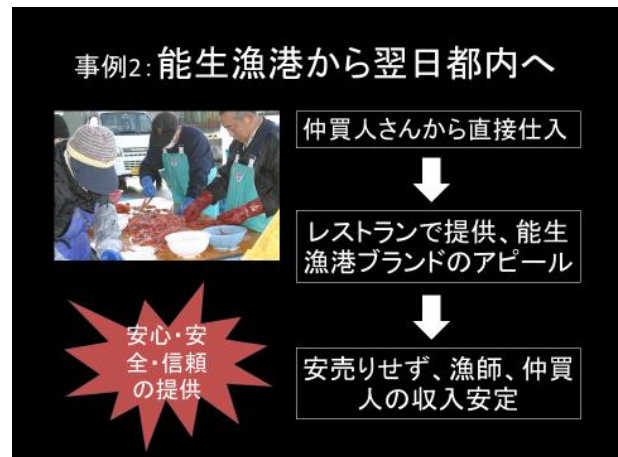
高波 利幸 氏



私の場合は、今取り組んでいる事例の紹介になるのですが、能生漁港から翌日には都内へ。交通の便が良くなりましたので、荷物が届きます。能生の漁港の仲買さんからご協力賜りまして、直接仕入れを行っております。それで、先ほどのレストランで、能生漁港のブランドということで、お客様にお魚を紹介しております。

これもトマト同様、余っているからとか獲れ過ぎちゃったから安くするよというお話をよくいただくのですが、「いや、普通のお値段で買います」と。やはり料理にするので、800円、1000円くらいの商品にはなって、小さなお魚でも全部ミンチにしてお魚のミートソースを

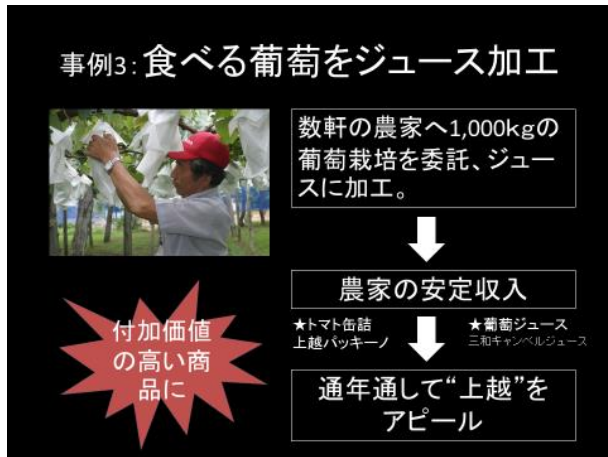
作ってスパゲティミートソースにすれば、それなりのお値段で売れるものですから、きちっとお金はとってくださいとお話しして、漁師さんと仲買さんの収入の安定につながればいいなと思ってやっています。



あとは、安心・安全・信頼の提供ということで、船で沖へ出て、底曳きの網を仕掛けて、翌日の朝、漁師さんが出て行って、昼ぐらいには漁港へ帰ってきて、3時から競り。そこで仲買さんにお魚を競りで買っていただいたら、すぐ宅急便に乗って翌日東京ということで、僕のレストランでは、毎月、月替わりでおすすめメニューっていうのをご紹介しているのですが、こんな大きな黒板に、一生懸命、能生漁港で昨日獲れたお魚が今日来ましたということをお店のスタッフがお客様に個々にアピールして、その鮮度の良さとか、安心・信頼をご提供しております。

山本ブドウ園ですとか北代ブドウ園とかって、そこもやっぱり高齢で、高齢者の方々が6軒集まってブドウ園を頑張って経営しているんですが、普通にこう生食する、生で食べるブドウっていうのはすごく手間かけて、二房なったら一房落として、一房の品質を上げるという作り方をしてらっしゃるんですけども、そのブドウは一時、8月末から9月、10月くらいで終わってしまうんですけど、それだけの稼ぎだと少ないので、キャンベルっていう品種的には栽培量が少なくなってきた、もっと粒の大きい種のないブドウっていうのが人気だそうで、そっちへみなさん切り替えてらっしゃるんですが、僕が小さい頃食べていたブドウがキャンベルだったので、非常に香りもいいし味も濃かったんで、これジュースにしたら美味しいんじゃないかと思って、ジュースを作ることを思

いつきました。



そこで、数軒の農家の方々に 1000kg 位のキャンベルを作っていただいて、それを加工してジュースにしました。それを通年通して、上越のブランド、上越のジュースということでお客様にご紹介しております。生で売るよりは、やっぱりジュースにして売の方が、いいお値段がいただけます。レストランの冷蔵庫で冷やして、きっちとしたグラスで冷やして、サービスマンがこうサービスすると、まあボトルで提供しているんですけども、やっぱり 1 本あたり 1000 円ちょっとお金をいただけますので、農家さんにもそれなりの収入を得ていただけるように取引しています。

あとは都内で展開していますレストランにですね、一生懸命県内の調理師学校から新卒採用を毎年しております。だいたい 6、7 名の方々がいつもご入社いただくんですが、東京に行きたいという人がいれば東京へ出す。地元に残って地元で頑張りたいという人がいれば地元で頑張ってください。都内のお店が何件かありますので、場所場所によって客層が違っていたり、やっぱりその場所場所でメニューが違ってたりするので、都内でいろんな経験を積んでいただきます。

中にはやっぱり意識の高い人はイタリアに行ってみたいということで、イタリア修行に行く人もいるわけなんですけど、だいたい 5 年から 10 年くらいですね、地元へ帰ってきてまた新潟や上越のお店で勤めていただいてもよし、自分の田舎で独立してお店を開いてもよしということで、人材育成に関してはそういうビジョンを持って頑張っております。そうするとまた、地元の農産物を

使った料理屋さんが増えて、地域の活性化に結び付くのではないかなと思っております。

この写真なんですけど、月 1 回、東京のシェフたちが上越に集まって、上越の食材を使って試作を行っている風景なんですけども、地元の食材をどう使えばいいかということと同時に学べますので、越の丸茄子をイタリア料理でどう使うとか、または、いちじくをイタリア料理でどう使うとか、そういう事を勉強している最中、途中でございます。



次のスライド、これは今年の春、本町通りの界隈でお花見期間中にイタリアンフェスティバルを開催していただきまして、市内のイタリア料理店 7 軒が協力してイベントに参加したわけなんですけど、今まで「ラーメンまつり」だったということで、今年はイタリア料理を中心にしたイベントにしようということで、ご依頼があったので、僕らで新しいイベントの目玉になるといいねとってやってみました。個性あるイベントづくりというテーマで、例えば仲町の大門マルシェですとか、あと



今開催期間中なんですけど、オクトーバーフェスト、今高田公園内でドイツビールフェストをやっていますが、あとはこれからある謙信公祭などに、その若い世代にむけた食文化の提案とその個性あるイベントというものを通して楽しんでいただけたらなということも、参加してやっております。

上越にすごく思い入れがあるので、上越をどうしても全国に発信したいと思ってですね、去年金谷山を通過したんですが、クラシックカーのイベントをですね、今年も誘致しました。誘致したって言うても別に金を使っただけじゃなくて、もともとその主催者が僕の東京の南青山のお客様でございまして、いつも原宿をスタートして、1300km 走って原宿に戻るんですけども、原宿の明治神宮の駐車場でサンドイッチを朝食で配ることを12年ひたむきにやっておりましたら、去年あたりから上越を通ってもいいよということで、今年も通っていただくんですけども、今年が高田公園内に車が走ってしまうというようなことが叶いました。

これは、全国各地から参加者の方がいらっしやって、今年には特に、世界15か国から60台の特別な車が参加するというので、いつも120台くらいなんですけど、180台の規模でやるんですけど、それが高田公園内を走って、車の専門誌とかテレビで取り上げていただくという。去年もお米を配ったり、あと義の塩をお配りしたりだとか、観光パンフレットをお配りしたりだとかしたんですが、上越の土地柄とかですね、おもてなしの心を関東方面のお客様や全国のお客様にアピールできたらいいなと思って頑張っているイベントです。



事例7: 青空カフェ



最後にもう一つ。これは実は春に移動販売車を購入してきたので、薪のピザ窯を積んだトラックを使ってですね、委託栽培先の農家さんへ行って、これは大潟のいちご農家さんなんですけど、いちごとマスカルポーネチーズというチーズをのつけたデザートピザをですね、その場で焼いてみました。いちご観光農園なので、いちご狩りに来たお客様が帰りにいちごのつたデザートピザを食べて帰っていただくと。なかなか好評で面白かったです。

これを茄子だとか、ほかの農産物も、その委託農家の畑まで出かけて、例えばお客様の収穫したものをその場でイタリア料理にしてあげるといことも今後やっていければいいなと思っています。あと、その生産者と消費者の方を直接結ぶ場になればいいかなと思ってやっております。以上でございます。

(戸所)

どうもありがとうございました。

私は今日初めて高波さんにお会いしました際、「東京と上越とどちらに長く居られるのですか？」とお聞きしましたら、「ほとんど上越です」と応えられ、非常に感動いたしました。本社が上越にあり、高波さんが上越に居られることで、上越に東京からも人を呼ぶことになり、上越から色々な情報発信ができます。

こんなこと申し上げるのは、私の居住地である前橋には、結構全国的に有名な企業がいくつも育っています。しかし、企業規模が大きくなり、有名になると東京へ本社を移してしまう。その結果、雇用も税収も流出し、地域創生に結びつかない。地域で育った企業がその地域で人を育てていくことが地域創生、地域の持続的発展には

重要です。高波さんのお話をお聞きして地域に根差した企業がそこで大きくなるのが地域創生には必要なんだと改めて感じました。どうもありがとうございました。

■上越市の活性化に向けた提案②

「結婚・出産・子育て」

中條 美奈子 氏



話足りなかった場面から行きます。上越市ってとっても子育てしやすいまちで、いろんな場所から視察が来たりだとか、私もお話をしにいろんな全国へ行ったりもするのですが、いろいろ比べてもやっぱり上越っていいなと思うことがたくさんあります。せっかくの「子育てしやすい上越」というブランドを、うまく活かしていくことはできないかなと考えています。

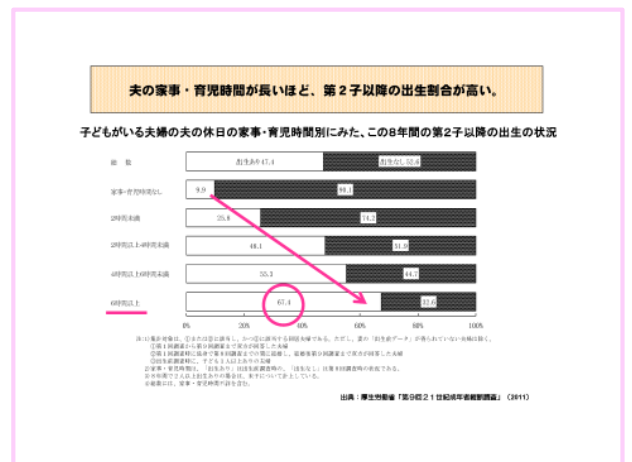
去年、結婚・妊娠・出産・子育てのライフステージリレーネットワークというネットワークを作って、今事務局をしていますけども、そこで集まって話をしていた時にも、いろんな分野の人が集まって話をするといいものだなと思いました。上越は子育てしやすいということ、いろんな分野の人たちが一緒になって一度に売り出していったら面白いんじゃないかなと思うんです。

例えばフォーラムをやって全国から人を呼ぶというのもいいですし、あるいは毎年8月1日の広報上越に先ほどの鳥取県のようなパンフが入り、お盆で帰省した若者が読むというのはどうでしょう。上越の親たちはできればわが子に帰ってきてほしいと思っているけれども、やっぱり東京の大企業に勤めている方がいいのでは？と思

ってしまう。でも、データで比べてみて上越で働いていても遜色なくちゃんと貯金もできるし、一生涯で見たら、上越にいる方がもっといいかもしれないよと、自信をもって親たちが言えたらよいのではと思います。そんなイメージ戦略を行っていけないかなと。

それにつけてもやっぱり、女性が希望をもって働き続けられる上越になって欲しいです。企業の方にもお願いになりますが、結婚前は女の子扱い、出産して戻ってきたらパートのおばちゃんに働けばいいよね、といった将来しか思い描けないとしたら、18歳まで上越で育ち進学等で離れた女性たちは帰ってこない。帰って来づらい。今女性が、出産で仕事を辞めないでずっと働き続けた場合と、出産で辞めてパートで働き続けた場合とで生涯賃金どのくらい違うのかといったデータも出ています。試算によっていろいろ違いますが、多くて2億、少なくとも1億以上の差があるといわれています。ぜひ女性が希望をもってキャリア継続できるような働き方をイメージできる上越にして欲しい。

それからパパを家に帰して欲しいなと思います。これは厚生労働省のデータですけども、夫が家事育児期間が長いほど、第2子以降の出生割合が高いというデータです。



今、いろんな少子化対策が行われていますが、でもその中で、パパを家に帰そうというのは大変少ない。第3子から経済支援をいくらあげたら、とか、第1子からあげたらどうだとか、いろんなアイデアがあってもどれも素晴らしいんですけども。そこで欠けているのが、パパを子育てできるように、夫がちゃんと育児できるように家に帰そうっていう対策は出てきません。それは無理と

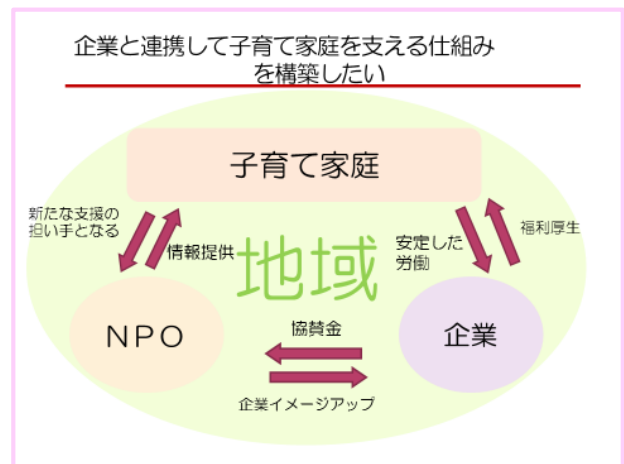
みなさん考えてらっしゃるようで、「それは確かにいいだろう、でも夢物語。現実は違う。」とおっしゃるんです。まあそんなのかもしれないと思うんですけども、実現した国もあるのです。また、日本全国でとなったら夢物語なのかもしれませんが、この上越だったらできるかもしれない。勤務時間が終わって、家に帰るまであまり時間もかからない環境があります。東京のように通勤に電車で2時間かかる環境ではない。もしかしたら、ちょっと意識を変えとか、光の当て方を変えるだけで、パパは家に帰れるかもしれない。そこをやっていかないと。女性だけが子育て頑張れるようにと制度を整えたとしても限界があると思います。

先ほどの企業子宝率もすごく面白いなと思って、出してみたらどうだろうか？もしかすると意外と上越高いかもしれない。それで上越市を売り出してはどうかと思って聞いておりました。

あとは乳幼児期の家庭に対して、さらに手厚い支援が必要になるだろうなと。これは私たちもしっかりやっていこうと思うのですが、今は祖父母になり始める世代はまだ働いているのです。以前なら、娘が子どもを産むころには、その父母は現役を引退し第二の人生になっていて、十分面倒を見てやれたのですが。今は定年が65歳。そうすると孫が生まれる時期は、おじいちゃんおばあちゃんは支援にまわれない。だから子育てを始めたばかりの時期に、ちょっと子どもを預かって欲しいとか、子育てを手伝って欲しいという要望は増える一方だと考えます。そこをどうやって支えていくのがよいかと考えています。

企業にも福利厚生として子育て支援というものを考えてもらえたらいいなと思います。従業員が子どもを産む場合に福利厚生として子育てを支援する。出産祝い金何万円で終わりにしてしまわずに、もっと違う支援が考えられないかなと思っています。結婚して子どもを産みたいけれど、いつ産んでいいかわからないという相談を受けることがあります。産み時がわからないと言うのです。子どもが生まれた後の自分たち夫婦の生活イメージが湧かない。子どもをどうやって育て、どうやったら働き続けられるんだろう。夫も自分も忙しいのにどうしたらいい？といった相談です。出産後、仕事と家庭をどのように両立していくのかを男女ともに産まれる前から考える

ことができたらいいのではと思っています。そんな機会を、企業側で提供していただくと嬉しいなと思います。もちろんそのような支援情報をもった人材を各企業が配置することはできないでしょうから、いくらでもNPOが出ていきます。今、市には様々な支援策があり、民間にもいろんなサービスがある。これとこれがあなたの家庭に合っていますよ、この支援策を使えば働き続けられますよ、といった子育て支援のオーダーメイドができれば、子どもを持つことをためらう人たちが減るのではと思っています。地域全体で子育てを支える、その「地域」という言葉の中にももちろん企業も含まれていると思うので。みんなが支えあいながら、子育てを支援していけるといいなと考えています。



(戸所)

どうもありがとうございました。

お聞きしていて、子供は地域の宝であり、それを育てるシステム作りをする必要があると思いながら、お聞きしました。30数年前に、私がアメリカへ客員教授として行きました時、家族で行ったからでしょうか、ウェルカムパーティーという、おばあちゃんたちが何か困ったことがあったら何でもご相談ください、子育ても、と来られたのですね。右も左もわかりません時に、なんやかんやとアドバイスしてくださったり、あるいは、子供をちょっと預かってくださったり、というようなことがあったのを思い出しました。皆さんが力を合わせて子供を地

域で育てていくということが必要なんだということをつくづく思います。

次に関原さん、お願いします。

■上越市の活性化に向けた提案③

「まちの活性化」

関原 剛 氏



これも、到底 10 分じゃ無理だと思いますが、頑張ってみます。

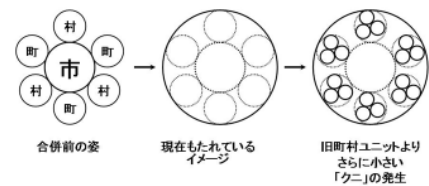
今までご説明した、ひもとその存在である若者たちがいることで、連動されたものになるとえらく物事が変わるということから、近未来をどうすりゃいいかという一つの考え方です。

上越市が 14 市町村で合併しまして、現在持たれているイメージはあそこに点、点、点ってあるように、「三和あるよ」「清里あるよ」みたいな感じで、その枠が残っていて、うすらぼんやりとあって、みんなあるというイメージを持たれているし、そうでいいんだと思うんですけど、実際はおそらくそういう旧町村区分よりももっと小さい区分で活動的な場がおそらく生まれてくるだろうと思う。それがさっき言った 350 とか 400 の集落、集合体ですね。

合併という大きなものは、小さなものを大きくすることは非常に重要で、必要なため多々あったと思うんですけど、それをやるからには、同時に大きくなってしまった部分を再び小さくすることの施策が何かいるのではないかと思います。

■集落集合体「クニ」は、合併前の町村より「小さな範囲」

広域合併後の実態



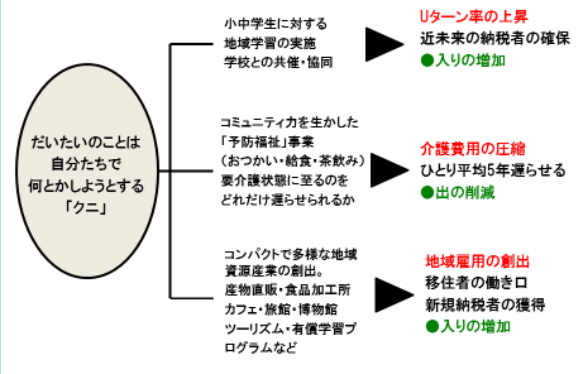
広域合併後の旧町村範囲を、そのまま「自治区」へとスライドさせた範囲では、「クニ」としては、まだ大きすぎる。より小さい(300~500)範囲においてのみ、内発的な自治が可能になる。

- 小さなものを大きくすると同時に
- 大きなひとつを、ふたたび小さく分けることが重要

ただ単にそういう村落集合体的なものもいい、何でいいのかって言うんですけど、まずは行政コストの削減につながる人が多いんです、実は。なぜならばさっきも言いましたように、だいたいのは自分たちで何とかしようとする能力と資金あるいはその人材を持っているということになってきますと、特に子供・高齢者・雇用に関して効果がある。まず、小学生・中学生に対してのUターン、Uターンにつながる教育。これは、仕事があるなし以前に小中学生のころに自分の郷土で、どのような郷土教育を受けたかというのが非常に重要で、サケが戻ってくるにはその原体験がどうしてもいるわけです。都市と比較して、どれだけ生存性能が高いかということをお話すと、中学生なんかはずごくびっくりして喜ぶ。こういう事を延々とやるということですよ。

■集落集合体「クニ」により、行政コスト削減につながる主な事業

子供・高齢者・雇用

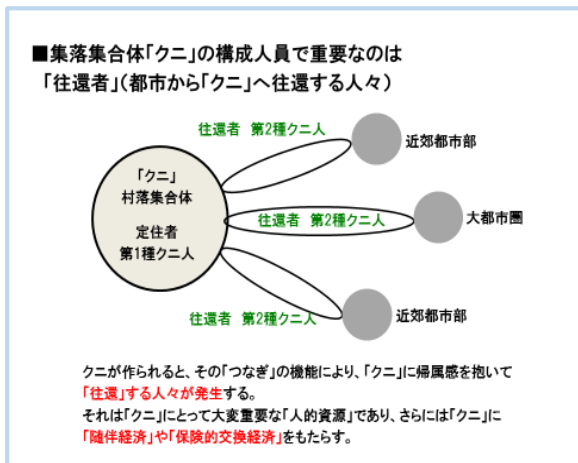


それと、予防福祉ですね。要するに、要介護になってしまうのを何年延ばすことができるか。その伸ばすため

の機能を、コミュニティがしっかりしている場ならば全部金銭に換算しないような方法論や構造でできるのではないかということで、一人5年遅らせたなら、山の老人たちが節約する金は大変なことになります。

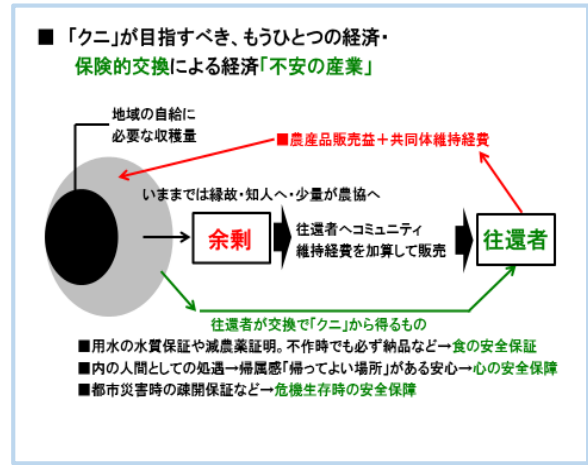
次はですね、ちっちゃな仕事をつくるということですね。これで地域雇用を少しずつでもつくるということで、納税者を増やすことと減らすことで、行政としても自立的なコミュニティのぼろぼろとできることだったら、非常に重要なことに今後なってくるだろう。

もう一つ重要なのは、どこにも見えてこないのですが、定住者でもなくて観光客でもない、「往還者」という人々の存在。そういうクニ的な場に帰属感をもってせつせと通ってきてくれる人達。我々で言えば、60%の人がおおよそそれに該当します。大都市圏、近郊都市圏ですね。単なる1回来て居なくなる人ではない。この人たちは、



私は「随伴経済」と呼んでいます、通ってくるたびに経済性を伴って、物を買っていってくれる。それは、補填的経済というのをもたらす顧客になってくれるわけです。それはなにかというと、生老病死ですね。都市における不安の産業です。アフラックです。田舎ってのは結局生存性が高いものですから、米を作っているけど余剰を結構持っているわけで、そういうものをはっきりとした往還者に売るということで、そこに共同体の維持経費を徴収させてもらう。

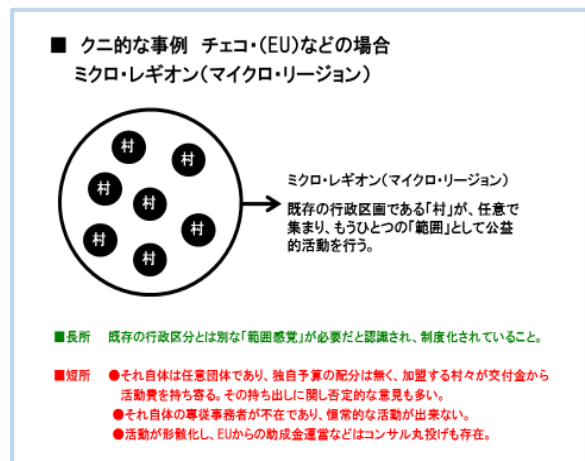
反対に、用水の水質保障とか、戻ってきて内側の人間として処遇するとか、都市災害があった時に疎開を特約する。というようなことで、都市生活の不安に対応するものを集落集合体がつくれれば、そこに経済が、補填的



な経済ができるわけです。

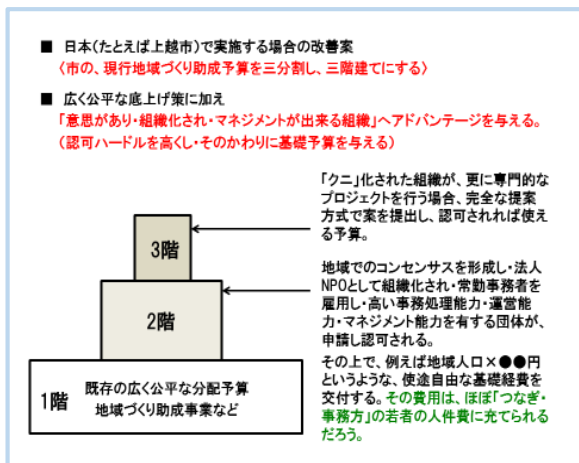
村の産業に非常に重要なのは、特に目立った特産物が無くてもよいということで、菜っ葉と米があればなんとか。今までは特産品つくって村が繁盛しようってこといわれたんですが、それは優等生をつくって劣等生もつくり出すということを知ってなくてですね、特産品ではない部分で維持経費を出すような構図を考えなきゃいけない。

この前、チェコに行ってきたんですけど、EUのやり口はですね、ちょっとだけいいなと思ったのは、このミクロ・レギオン。マイクロ・リージョンってのがあって、村々があるんですけど、村同士がまとまってもうひとつのまあまあ小さい範囲のものをつくっている。これの素晴らしいところは、すでに行政区分とは別な「範囲感覚」が必要なんだと認識があり、制度化されているということです。しかし短所はですね、それ自体が任意団体で独自の金がない。それから専従事務者が不在であって、恒常的な活動ができておりませんでした。それから活動が



形骸化し、EUからの補助金が出たときにコンサル丸投げっていうのがあった。これはよろしくない点です。

例えば上越市の場合ですね、まちづくり支援補助金みたいなのがあって大変素晴らしい制度だなと思うんですが、確か年間1億8000万くらいあるんですが、それを現行のまま、また同じようにやるのではなく、もしかしたらという案ですが、三分割にして1階2階3階に分ける。1階は既存のままのやり方でやっていく。広く公平に頭割りってやつです。しかしながらここが大事なんですが、2階はですね、さっき言った地域でのコンセンサスをつくり、法人NPOとして組織され、常勤事務者を雇用し、大変ですけど、高い事務処理能力、運営能力、マネジメント能力を有する団体が申請して認可されたら、その団体に対して、当該活動の地域の人口比×何千円というような基礎経費を交付するってやり口にするのも一つの案ではないか。この金はおそらく若者の雇用に使われます。ひもですね。さらにもう一階上を作って、そういうふうに「クニ」化された組織がさらに専門的なプロジェクトを行う場合に、完全なプロポーザル方式で市に提案して、それを良ければいいし、ダメならダメという。こういうふうに、意志があり、組織化されマネジメントできる組織へアドバンテージを与えるような法的な構造を、上越市が採用するかどうか非常に興味があります。ハードルは高く、ということですね。



ただこれ、問題ありまして、こういうのやる時はいつもそうなんですけど、この組織構造はいったいいかなものか、はっきりさせなきゃいけない。これ、金欲しさに形骸化した組織を捏造する可能性があります。それ

から、認可、認可っていうんですけど、認可主体の質の担保ですね。公平性や広い知見。認可を判断する「有識者」などの能力が不明瞭、こういう問題が必ず出ます。大事なのは、それを運営する人材がない。認可に必要な総合事務人材の不足。それと、どのようにすればよいかそもそもわからないし、相談する場所がない。これらをやっぱり克服しないとダメになる。

克服すべき問題

- その組織構造の明示 (認可条件の明示)
金欲しさに形骸化した「組織」を捏造する可能性
- その認可主体の質の担保 (公平性・広い知見)
認可を判断する「有識者」などの能力が不明瞭
- それを運営する人材
認可に必要な総合事務人材の不足
- どのようにすればよいか相談できる機能
作りかたのイロハから相談できる実践的相談機能の不在

それで、実は大事なのが、こういうことをやるとき大事なのが、ひもの若者たちの能力。人材を作ることに結局は、尽きます。こういうクニ的なものを運営できる戦術、能力が非常に多岐にわたる。そこで、資料にだ一つと書いてあるわけです。社会生活、生活者としての知識、農林水産、民俗文化、調査、運営です、組織運営、会計マネジメント、地域資源の産業化、助成金申請、地域社会分析のための学術的知識、各自が担当する専門的知識が必要で、今、だいたいオン・ザ・ジョブ・トレーニングとかいうですね、現場で学べっていう指示で若者をばらまいているんですが、裏のじいちゃんばあちゃんがで

「クニ」を運営するために必要な人材は 分業型の専門家ではなく・総合的能力を保持する若者

- 「クニ」において専従スタッフに必要な能力
- 社会生活に不可欠な基礎知識
 - 生活者としての知識
 - 農業・林業等の基礎知識
 - 民俗文化の基礎知識
 - 地域調査に関する知識
 - 組織運営についての知識
 - 会計・事業マネジメントの知識
 - 地域資源を産業化するための知識
 - 助成金申請などの行政事務の知識
 - 地域社会分析のための学術的知識
 - 各自が担当する専門的知識(森林・環境・農産など)
- 過度の現場主義は危険→現場でのOJTだけでは、組織運営やマネジメント行動哲学などは学べない

すね、組織運営なんて知ってるわけないんで、オン・ザ・ジョブ・トレーニングには限界があります。こんなものでうまくいって思っていたらそれは夢の話。

それから現状の課題は、総務省は、これソフトからハードは間違いで、ハードからソフトです。小田切さんのやつです。これはいいことなんですけども、ハードだつて必要なんですけども、それはまあ置いて置きましょう。今の支援員とか、村づくりなんとか委員、いっぱいいるんですが、結構ひどい目にあっている若者多くてです。ここに書いてあるの、これ実例です。行政と地域の伝書鳩と化してやがて疲れ果てる。基礎が欠落したまま若者に対して地域が失望していく。どうしていいかわからない若者がうつ病になって孤立する。認識の薄い若者が時限でただムラを利用し、俺の経歴にするんだとか言って去るだけ。何もできないままムラの高齢者に甘えて、ムラの中でただマスコットの扶養家族になっていく。

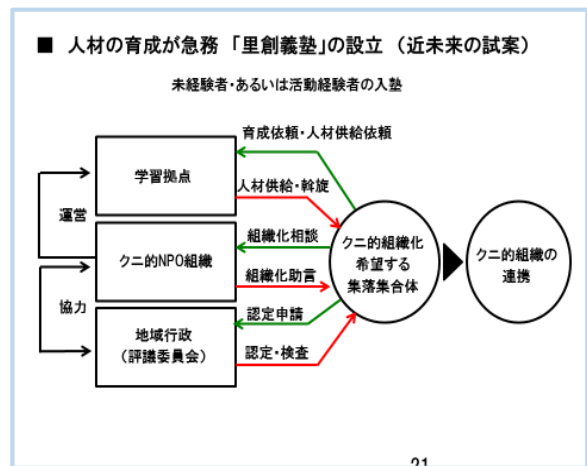
■ 現状の課題
 人材不在のまま、制度が消費されてゆく。
 ソフトからハードへは、よいことだが、
 基礎学習と受入れ機能が欠落したままでは効果が無い

- 若者が、行政と地域の伝書鳩化し、やがて疲弊してゆく。
- 基礎が欠落した若者に対して、地域が失望してゆく。
- どうしていいかわからない若者が「うつ」になり、孤立してゆく。
- 認識の薄い若者が、時限でムラを利用し、自分の「経歴」にしてゆくだけ。
- 何もできないまま高齢者に甘え、ムラの中でただマスコットの扶養家族と化してゆく。
- 若者がムラの閉鎖性に挫折し、仲介者も無いまま、ムラに失望してゆく。
- ローカルの権力者に上下関係を強要され、パワハラやそれに起因するセクハラが発生
- 制度の助成が時限なので、金の切れ目で、縁も切れてゆく。
- 若者をバックアップする地域内組織が無いため、まず人間関係でつまづく。
- 制度を「モトリアム」で利用する若者が増え、本質的な活動に結びつかない。

それから、若者がムラの閉鎖性に挫折して、間に立つてくれる仲介者もないままただ失望していく。それから、ローカルな権力者、どこにでもいますよね、その人に上下関係を強要され、パワハラやそれに起因する、ひどい場合はセクハラが発生しています。制度の助成が時限なので、金の切れ目で縁も切れていく。若者をバックアップする地域内組織が無くて、とりあえず爆弾のように地域に落とされるので、人間関係でつまづく。制度を「モトリアム」で利用する若者が増えて本格的な活動にならないというのが非常な問題です。それで、我々は、「里創義塾」っていうちっちゃい学校をつくったんですが、ま、行政と共同できればいいんですけども、そこから

人材をつくりだして総合的なスキルのあるひとを、1年制の学校で今学んでもらってですね、寄宿生、総寄宿制度でやっていこうと。地域内、上越でもいいし、他地域でもそうなんです、こういうクニ的な組織をつくらうとする、希望するところがあれば、そういう人材を送り込んだり、その地域から人材を送り込んでもらって共有したり、あるいは運営のなんかでわからないことがあればお教えできることはするということを、延々とやっていこうということを今やり始めております。

ここから先はですね、とってもいいこと書いてあるんですが自分で言うのも何ですが、10枚もあるんで読んでおいていただければよいと思います。ありがとうございます。終わります。



過疎集落が継続する未来のために
 目指すべきもの
「クニ」

主に日本の過疎地などの
 半自給的な生存力を残存させている
 集落の集合体において
 以下にあげる10項目の達成を
 意思を持って試みている場
 (場=土地+人間+行為の総体)

クニの骨子①
 そこに具体の「土地」があること。

「ここ」と言える具体の土地が存在すること。
 生存の共同体は観念ではない。必ず具体の土地
 が存在していなければならない。それが無ければ
 ただの観念論になる。
 また、そこに生きる人々が「ここ」は「ここ」であると、
 しっかり認識していることが重要。

クニの骨子②
 そこに具体の「人々」がいること。

そこで生きる人々が「われら」と感覚できること。
 生存の共同体は観念ではない。必ず具体の
 人々が存在していなければならない。また人々
 が「われら」は「われら」であると、しっかり認識し
 ていることが重要である。

※都会のマンションに「われら」は無い。

クニの骨子③
 ちょうどよい広さがあること。

ひとつの集落では窮屈すぎ、合併した市では大き
 すぎる。誰もが直接対話できる範囲でありながら、
 窮屈ではなくほどよい広がりがある範囲。かつて
 の大字・あるいは明治の小学校区ほどの広がりが必要。
 ※人口で言えば300~500人程度

クニの骨子④
「つなぎ」の機能を有していること

集落がたくさんあっても、それらをつなぐ機能が無ければ「クニ」にはならない。どのような組織形態でもよいが、つなぎの役を果たす専従(有償)の事務者が存在することが不可欠。ひもの無い数珠はバラバラの玉。どんなに質素でも、ひもが一本あれば数珠になる。

※数珠とは「運動するもの」の意

クニの骨子⑤
「事務処理」の機能を有していること

やりたいことがたくさんあっても、それらの**具体的事務**を処理する係りがいなくては何もできない。かつての村役場はそれをやってくれたが、合併した大都市の職員は、そのようなことに、もはや手は回らない。専従者(有償)という**自前の職員を村落集合体が保持**したとき、それが「クニ」への始まりとなる。

クニの骨子⑥
「経済の自立」が達成できていること

「つなぎ」の係りや、「事務処理」の係りの専従者の**資金を**、集落集合体の総合力や、地域資源を活かした産業によって**捻出できていること**。村落で働きたいという意味ある若者がいても、継続的に給料が払える経済構造が存在しなくては、人材をそこに留まらせることはできない。

クニの骨子⑦
そこが外に開かれていること

内だけでどうにかするのなら、過疎にはなっていない。今後は、外からの新たな人々の力が不可欠。集落集合体が内に閉じこもって、いつまでもヨソモノという差別・区別で「外」を避けていたのでは、貴重な人材は他の開かれた集落に行くだけ。「まともな外の人」は「**新たな村人**」として通すべき。「クニ」は定住者だけが偉い場ではない。「**往還者**」という**通いの人々も「われら」に含まれる**。

クニの骨子⑧
そこで生存の「まかない」が行われていること

役所まかせ・他人まかせ、あるいはすべてを金で買うだけの暮らしではなく、米や野菜をはじめ、教育・民俗・福祉・必要経費の**自主獲得**まで含め、**総合的な「まかない」が試み続けられていること**が不可欠。
(※達成ではなく、「試み続けられている」ということの意味に留意する)

クニの骨子⑨
そこならではの**真正性**を持つこと

「ここ」における「**われら**」によって試みられる、生き続けるための活動によって、「**それをするべきだ(義務)**」・「**それをしたほうがよい(奨励)**」・「**それをしないほうがよい(警告)**」・「**それをしてはならない(禁止)**」という無言の規範が存在し、その規範を、そこで生きるために「**真正なもの**」として人々が無理なく認識していること。これが、「場」における**真正性の有無**である。

クニの骨子⑩
誇りを持つ事

「**場における真正性**」によって、**誇りが醸成され、誇りを持つこと**によって、その場への**帰属感**が生まれる。**自主自立**に最も必要なのは**誇り**である。

(戸所)

発表時間にご協力いただきまして、ありがとうございます。会場の皆様にはぜひ配布資料を読んで理解を深めていただきたいと思います。

今、関原さんからお話しいただきました小さな自治は、今回の上越市の合併理念としても大きなものです。私は今回の平成の大合併は、大都市化分都市化型合併にすべきと言ってきました。多くの市町村が合併して従前よりも大都市になりました。それによって、災害時などに相互協力がしやすくなります。

上越でも中越沖地震が起こった時に柿崎や吉川が甚大

な被害を受けましたが、高田や直江津があまり被害を受けなかったことによって、すぐに応援体制がとれ、迅速な復旧・復興ができました。

一方で、地域社会で生きていく上において、何でも大きくなった地域が一緒でやれるはずはないので、やはり小さな自治は必要となります。個性豊かな小さな地域が相互にネットワークしながら、全体にパワーアップすることも重要です。外から見ると大東京でも、よく見ると東京は小さな地域・自治がモザイク状に集まり、それらが相互にネットワーク化して大きな力を発揮していることが判ります。たとえば谷根干といわれる谷中とか千駄木だとか根津。これ小さな地域ですが、ほんとにいろいろな活動をやり、活性化している。小さな自治を寄せ集め、新たな地域社会をどうつくりあげていくかが、今回の地方創生、地域創生では重要であり、その辺を、関原さんはダイレクトにご指摘いただいていると思います。若者の問題なども含め、様々な問題をどう解決していくかというところに地域創生、目的もあると思うわけです。

皆様のご協力で、時間通りに進んできております。この3名のパネリストのお話について、末宗様のご感想なりコメントをいただければと思います。よろしく願います。

■上越市の活性化に向けた提案についてのコメント

末宗 徹郎 氏



実は私、上越市に来ましたのは、10年前市役所に来まして、その時はちょうど大合併した直後です。過疎対策室長というのをやっていました。いま、上越市の合併というのは、ちょうど今お話いただきましたように、全国的にも注目されてまして、14の市町村が合併するというのは、大規模な合併であり、いわゆる都市部的な要素と、集落的な要素を併せ持つようなご決断されたということで、10年前に来たのを思い出しました。

この地方創生というタイミングで再度訪問する機会をいただいたわけなんですけれど、ちょうど北陸新幹線も開業して上越妙高という駅ができており、やっぱりこれからの上越が地方創生を考えていくときに、あの時に大変な思いをして合併をした、そのメリットをですね、これからの地方創生でぜひ生かしていただきたい。北陸新幹線により、いろいろインバウンドがしやすくなった時に、中心部と周辺部というのは分離すべきじゃなくて、全体が一体となって、その広がった分いろいろな地域資源、持ち味を、宝物を確保しているわけなので、そういう視点でもう一回、これからの地方創生の中で、その両方の良さを併せ持つ強みをですね、再認識していただいて、スタートされるといいんじゃないかと思います。久しぶりに来て上越妙高駅の前なんかかなり様変わりしていますので、そういうことをひとつ活かしていただければいいなと思ったのが一つです。

それともうひとつは、先ほどからお三方の話を聞いて、やはり大事なことは、地域の総合力、キーワードでいう

と地域の総合力を発揮していただければと思いました。それぞれ仕事の分野とか、子育ての分野、まちの分野とあるわけですが、これからはやはり行政、市役所だけでなくすべてをカバーできるわけではないわけで、企業とかNPOとか、あるいは今日は3人も、かなり活発な活動をしている方ですが、今日このフォーラムにお越しの皆様も何がしかの形でいろいろ関心を持っているから今日お集まりなんだろうと思いますし、こうした住民の方々の参画が大事であると考えます。また、地方創生の総合戦略づくりに当たって、それぞれの部会の民間の方の活動だけじゃなくて、アクションメンバーといって、自分たちが手を挙げて、これからの上越のまちづくりをどうするか、子育て環境どうしようかという、多くの方が手を挙げて今回の地方創生に参画する意欲を見せているということをお聞かせいただきました。そういう意味では、村山市長さんが全体のコーディネートをされるんだろうと思いますけど、産業界だとかあるいは集落だとか企業、それから子育て関係者みなさんがそれぞれどういうふうに関わりながら、この地方創生というキーワードの中で、それこそ上越市の総合計画にある「人と地域が輝く上越」をつくっていくのか、みなさんが主体なんだという思いで、今3人の話を聞かせていただき、ますますご活躍いただければと思った次第です。

● 質疑

私は横浜出身で、仕事の関係で新潟に移ってきて、そのまま定年が近かったので、もう定年だということで家を建てて暮らし始めたんですけど、とてもいいまちだなと思います。上越、なんでみんなこんないいところに集まって来ないんだろうと簡単に思っちゃうんですけど。さっきの関原さんのお話の中で、ばらばらの町内、これだと行政の負担が大きい、そういう事を言われていたんですが、最近私もまちづくり市民大学講座、それでこの会を知ったんですけど、ここに集まってきたのはそれです。まちづくりってというのは自分たちでやらないとだめなんだと感じています。感じているんだけど、もっともっとうこういういろんな集まりがあるんだなあ、その集まりって、なんでもっとみんな知らないのかな、知り合えないのかな、まちってのはどう、公共ってのはどう、そのへんが、まあ、公共ならもっと交流が少ないのかもしれないけど、こういういい活動をされているんだから、もっと知られるようにする何かいい方法はないのか、その点についてちょっとお話を伺いたい。

● 応答（関原氏）

宣伝不足なわけですが、うち、割とよそでは有名なんですけど、上越では無名なので。いつもよその視察すぐ来るんです。上越では、目立たないように生きるってのをモットーにしています、できるだけ静かになってことでやっていますが、もしそういうんでしたら、さっき言い忘れたんですけど、セミナーのチラシがあったんですけど、公開セミナーとかもあるんで、里創義塾夏期講習というのがあって、結城さん来られて話をしますし、私も話をしますし、実は今日喋った内容というのは、パワーポイント 180 枚分なんです。3 時間かかるんです。それを 20 分でやれっつのは到底無理な話だったんですけど、次、こっちだったらフル規格でやりますので、ぜひ、あの少しお金いただきますけど、そこには同じようなお考えの方が集まってこられると思うので、桑取の山奥にありますので、ぜひお越しください。



全体総括に移させていただきます。

上越市は 14 市町村の合併によって都市力が強化されました。その中で、地方創生をいかに図るか、目下企画関係を中心にとりまとめをしているわけです。

問題点は、人口減少であり、人口減少社会において、地域組織をいかに維持できるかが課題です。

消滅都市や消滅集落は、地域の組織を維持できなくなった状態をいっています。私は 40 数年間地域づくりの調査・研究で全国・世界を見てきましたが、自然発生的に形成された上越の古い集落のようなところは、簡単にはつぶれない。簡単につぶれないのは一定の人がいて、それなりの基盤を持っているためです。

しかし、そのままほっておけばダメになる。地域創生への努力を常にしなければならぬ。あえて地「域」創生にしましたのは、国から見たら地方かもしれないが、地域の内部で生活・活動している者にとっては、地方でなく地域創生となります。

地域をいかに維持発展させるか、そのために伝統的集落の基盤をどう生かすか、そしてコミュニティづくりをどうするか。これは今日の話の中の、子育てについて、地域づくりについて、自治、地域維持にみんな関係してくるわけです。同時に、新しいインフラ整備とその活用が必要となる。「コンクリート」はいらぬわけではなく、必要なものは必要ですし、メンテナンスしていく必要もある。市長の話にもありましたように、新しいインフラである新幹線をどう活用するかも課題です。上越という多様性のある大きな自治体についても、その多様性を相

互に結節させ、他の自治体ともうまく連携しながら様々な問題を解決していく必要があります。

そのためには、皆さんが都市の将来像、上越の将来像を市民共通の認識として持つことが、非常に重要となります。

私の 40 数年間のまちづくりにおいて、関西のある都市と非常に深くかかわってきました。その都市は今でも人口が増えていますし、人口がこの数年間で数万増え、2025 年までは増加するといわれています。そうなった大きな要因は、市民が将来像を共通認識として、協力してまちづくりをしてきたことにあります。

将来像に基づき政策を立て、整備する。この時に最低限基本的に整えなければならないものと、それからそれぞれの地域にメリハリをつけて特色を出すものが必要になるわけです。そこにいかに地域資源を生かすか、今日も食材の話も含めていろんなそれに関するお話がありました。

以上の考え方は、末宗様からもありましたが、総合計画が重要となります。総合計画で上越市は「すこやかなまち」ということを謳っているわけです。これは、住みよいコミュニティを創っていくということであり、安心のある生活創造であり、同時にそれぞれの人が自己実現でき、地域文化を創ることになります。

それはまさに今日みなさんからお話いただいた人材育成に関係します。そして新しい自治や新しい公共において重要なことは、大きな世界の流れ、国全体の流れの中で、上越をどうするかを考えることです。また、新しいまちをつくっていくとする市民意識が重要になると感じております。

私は、外からきて上越市を応援する立場の人間でありますけれども、この 10 年ほど上越に関わらせていただきまして、先ほどの質疑で、上越がとっても素敵なので住んでいると言われましたけれども、まさに上越は素晴らしいと思っております。上越に事業所をもつ大手企業の方で上越から関西に転勤になった方が、「雪はあるけど、上越ってなかなか離れがたい。まあ命令だからこっちに来たけど。」と言っていました。

ところで上越市の問題点は何かというと、公共交通中心のまちになっていないとか、あるいは、まちづくりには中心と周辺の連携が不可欠ですが、それらが必ずしも

うまくない。先ほどの末宗様から、アンケートを取っていろいろ調べる必要性をご指摘いただきましたが、群馬県出身の東京在住の女性へのアンケートでは、500 名ほどへのアンケートですが、群馬に戻ると回答したのは 10 人に 1 人にすぎません。それ以外の人は帰りたくないということです。なぜ帰りたくないのかというと、公共交通が不便であるということと買い物不便というかまちがおもしろくないためと言っています。これは公共交通の便利な、中心街のにぎやかなまちづくりの必要性を示唆しています。その実現には、秩序ある土地利用が非常に重要であり、あるべき都市構造・都市像を明確にして、地域創生の戦略をつくる必要があります。

これから市民の皆さんと行政が協力して上越市の総合戦略をつくっていくということですが、本日の議論を参考にいただき、実効性のある総合戦略が策定されることを期待しています。今日の基調講演そしてパネラーの皆さんのお話が地域創生に寄与することを願いながら、本日のパネルディスカッションを終了させていただきたいと思っております。どうもありがとうございました。

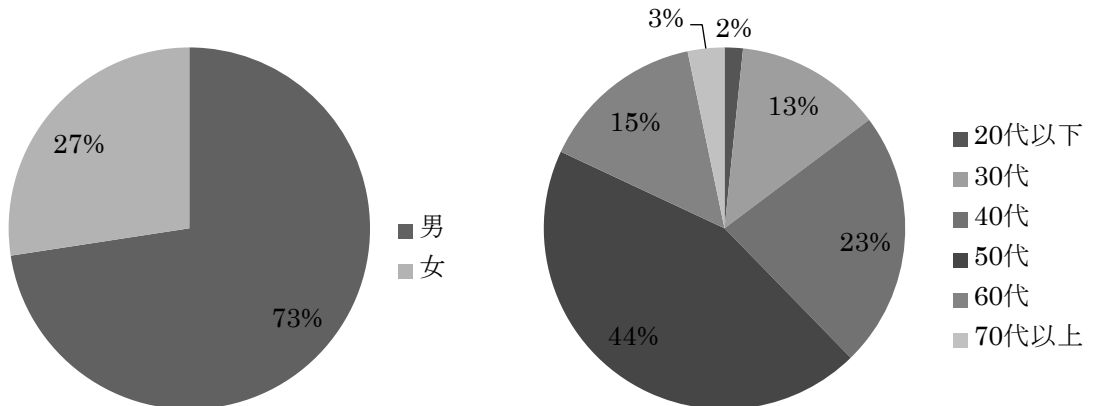
みんなで考える 上越の未来

～まち・ひと・しごと
創生を目指して～

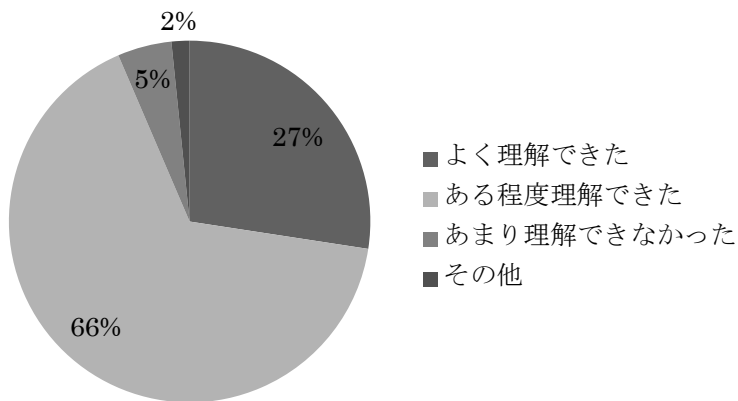
参加者アンケート結果まとめ

回答数：62

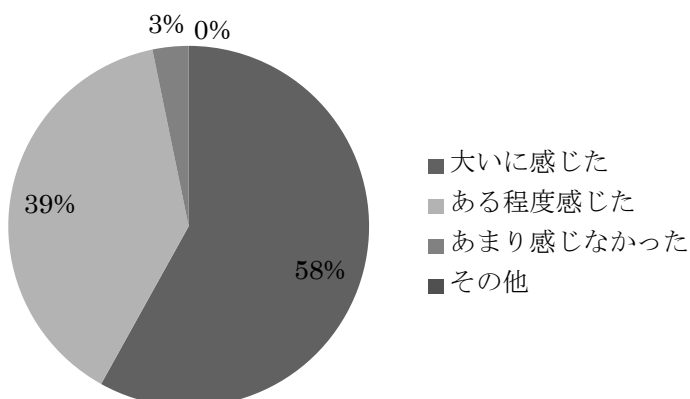
1 男女比、年齢構成



2 「地方創生」の趣旨、意義について



3 「地方創生」に取り組んでいく必要性について



4 フォーラムの感想（主なもの）

【基調講演】

- ・国の考え、方向性について理解を深めることができた。
- ・人口減少問題に、地域が協力して取り組みことがとても大切だと感じました。子どもたちが住みやすく地域に住み続けてくれるようなまちづくり、ひとづくりをするとともに、雇用の場を確保できるような取り組みを進めていきたいと思えます。
- ・人の流れを取り込むために広域的な連携の必要性について話されていたのが印象に残りました。
- ・趣旨は分かるが、具体的にどう進めていくのか、先進的な取組などもっと例示等がほしい。
- ・趣旨は理解したが、継続的にやるには課題が多いのでは。
- ・時間が少なくもっと事例等具体的な取組を知りたかった。
- ・具体的な取組や交付金の話を聞きたかった。

【パネルディスカッション】

- ・各パネリストの取り組み、現場の生の声が聞け、有意義であった。
- ・パネリストの方、若しくはその団体が活発的に活動していることはよくわかりましたが、人口減少をくい止めるには、更にそれぞれの団体の活動をつなげていく必要があると思いました。
- ・それぞれの分野で活躍された事例を元に、自分は何ができるか考える機会をいただけた。
- ・パネリストの報告は活動の裏付けに基づくものであり、傾聴に値するものであった。地域づくりは人づくりであり、官民を問わずこうした熱意と行動力を持つ人が今後どれ程つくれるかが今後の課題と感じた。
- ・パネリストの3名の活動を知れて、今後の上越にワクワクしました。
- ・出席者は市関係者が多いと思われるが、市民に（への）フィードバックをしっかりとやってほしい。

【全体を通して】

- ・今日のフォーラムを受けた人、全ての意識が高まり、人口減少をくい止めることができるような取り組みが生まれることを期待します。
- ・事例提供者のような活動をしているグループが多いと思うが、それがつながっていないのだと実感した。つながりをどう作っていくかが課題である。
- ・人口減少の中で、地域組織作り、維持の重要性そしていかに創世の実現を目指していくか、意見の場を持てて良かったと思えます。
- ・定期的にフォーラム等を開催して欲しい。
- ・地域創生の考え方は素晴らしいと思うが、市民が行政に頼るという意識を捨てない限り、行政からの押し付けと考えられるだけであり、市民意識の改革がまず必要と思った。
- ・戸所所長が最初に話した「上越の将来像をしっかりと市民が共通認識を持つことが大事」だという言葉が印象に残った。

5 事業提案、アイデア等

- ・街中の空き家を中心にした「安い店舗」を貸し出し、若い起業家を集める。
- ・中山間地の空き家を安く貸し出し、田舎暮らし体験を募集する。
- ・高齢化が進行する中で郊外型ではなく地域での商店街が活性化する方策が必要であるとする
- ・魅力ある小・中・高・大学・専門学校づくり（スポーツや音楽、英語に特化した小学校。校区外からも積極的に受け入れ、移住も促進する。特に女性が地元に残ることができやすい看護大学を核に）
- ・国の機関を上越へ誘致しては。通信はどこでもできるので不可能とは思えない。
- ・中・高校生からの地方創生教育が必要なのでは。
- ・取組については各論ありきではなく時系列で他都市との比較も含め、相對観を持って考える必要があるのではないかと思います。
- ・妙高市と合併で、総合力（特に観光）アップ。
- ・高波さんのような高い志を持った企業が早く創業されるよう「創業」支援事業に取り組むことは意義あるものと考えます。

地方創生フォーラム

みんなで考える上越の未来

～まち・ひと・しごとの創生を目指して～

記録集

平成 27 年 12 月発行

編集・発行

上越市企画政策部

上越市創造行政研究所

〒943-8601 新潟県上越市木田 1-1-3

TEL (025) 526-5111

FAX (025) 526-6184

E-mail: souzou@city.joetsu.lg.jp

<http://www.city.joetsu.niigata.jp/site/souzou-gyosei/>

